

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂尊

第三回

5章

ぼうこひょうが
暴虎馮河

てんぼう
天保三年（一八三二）

てんぼう
天保三年（一八三二）。

「安懷堂」で特待生となった章の進境は著しかった。もともと天游てんゆうに基礎を叩き込まれていたので進歩は早い。十数冊の原書を読破した時には、それまでぼんやりとしていた蘭語が、隅々までくつきり見えるように感じたとき、後に章は回顧かいこしている。

本の頁ページをじっと眺めていると、見知らぬ文字列が命を持った言葉に変わり、新しい顔を持つ。そうした言葉の列が、口々に新しい考えを言い立て、頭の中がいっぱいになる。

そんな章の蘭書の読み方は他の塾生とは、かなり違うということに師・信道しんどうは気がついた。

他の塾生は字引じびきを引いて、ひとつひとつの言葉の意味を調べて文意にたどりつく。

けれども章はひとつの言葉にこだわらず、文章全体を読んで単語を調べないことすらあるようだ。だが訳させると、辞書を引いた塾生より、文意がすっきり伝わってくる。

なぜそんな芸当ができるのか、と信道が訊ねると章は、はにかんで言う。

「文字を眺めていると、ひとつひとつの言葉が魚のように泳ぎ出すのです。そして、その魚たちが、私に語りかけてきます。私はその魚たちの語り合いを書き留めているだけなのです」

多くの塾生を見てきた信道も、さすがに章の言葉は理解しかねた。
——章は本物の天才かもしれん。

だが章の日本語は漢文調で堅苦しさが抜けなかった。このため信道は、蘭語よりはむしろ、日本語の指導をすることが多かった。

そして六月、章は塾頭じゅくしやうに任命されたのだった。

塾頭になって数日後、春もまだ浅いある日、章の元をひとりの青年が訪ねてきた。

背丈は章より低いはつちが、全身がバネのようにしなやかで浼刺はつちとした印象だ。その目は悪戯いたずらっ子のようにくるくると動いた。

その側には、羽織袴はおりばかまをきちんと着込んだ、品のいい青年が付き従っている。

「安懷堂の駿馬しゅんめ、緒方章さんっていうのは、あんたかい？」

章はうなずきながら、不快感を抱いたいだ。その言葉は章を褒めてい
るようでいて、実は小馬鹿こばかにしているようにも思える。いずれにし
ても初対面の相手に対して馴れ馴れしすぎるな。

章を上から下まで、品定めをするようにまじまじと見ていた相手
は、いきなり吹き出して、大笑いを始めた。

「何なんだよ、そのつんつるてんの着物は」

それは、貧しい章が、いつもつぎはぎで穴だらけの着物を着てい
たのを哀れんで、師匠の信道たけが与えてくれた着古しだった。小柄な
信道の服を大柄な章が着ると丈も袖も短く、長い手足がはみ出した。
けれども世事せじに無頓着むとんちやくな章は、平然とその服を着続けた。

だが、師の恩を厚く感じる章にとって、その無神経な言葉は感情
を害するものだった。

相手は勝手に、頼んでもいない自己紹介を始めた。

「おいらは伊奈家の御用人いなの田辺昇太郎たなべしやうたろうっていう者だ。ダサイ名前
だから、いづれ変えるつもりでいるけどな。で、こっちが御典医ごてんい松
本家七代当主、松本良甫りやうほ殿だ。仰々ぎやうぎやうしくて堅苦しいから、おいら
は『良さん』って呼んでる。あんたもそう呼べばいいよ」

章は畏かしこまって言う。

「私はそのような不躰ぶしつげなことは、御遠慮申し上げます」

「何だよ、若いのに堅苦しいもの言いをするヤツだなあ。そんなんで息が詰まらないかい？」

「いえ、一向に」

「ところで章はいくつだい？ ふうん、二十二か。なるほどねえ」

そう言うと、にやにや笑って言う。

「それならおいらの方が六つ年上だ。年上の言うことは敬って聞くもんだぜ」

いくら六つ年上とはいえ、初対面の相手をいきなり呼び捨てにするとは……。

あまりにも礼を失した態度に、年上というだけで敬う気にはなれない、と章は顔をしかめる。

だが、六つ年上ということは兄上と同じ年か、と思うと少し気後きおくれた。した。

ひたすら、一刻も早くこの無礼者を追い払いたい、という気持ちで一杯になる。

ところが、次の昇太郎の言葉に、章は思わず目を見開いた。

「おいらは、お前さんの師匠つぼいの坪井信道先生とも親しくさせてもらっているんだが、蘭学は実に奥深いもんだということが、ようやくわかってきた。そこでおいらは蘭学の達人を招いて、とびっきりの新しい塾をこしらえた。あんたも、おいらと一緒に、そこで学ぼう

ぜ」

「なぜ、私のような者を、お誘いになるのです？」

「蘭語がすぐくできるヤツだと、信道先生から聞いたからだ。正直、おいらも良さんも、蘭語はそれほど上手くない。だから蘭語の達人なヤツがいたら便利かな、と思つてね。あ、でもただ利用するわけじゃない。おいらたちがわからない言葉をちよつくら訳してくれば、それでいいんだよ。それで月謝なしでお偉い先生の授業を受けられるなんて、ピンゾロが続けて出たみたいにツイてる話だろ。さて御一同、これを棚ぼたと言わずしてなんとする」

芝居じみた調子で聞き慣れない言葉を羅列して、好き勝手に滔々と喋る相手に辟易しつつも、つられて章は思わず尋ねてしまう。

「その『お偉い先生』とはどなたでしょうか」

すると昇太郎は得意げな顔になって言う。

「聞いて驚くなよ、長崎はシーボルトの鳴滝塾出身の鬼才、高野長英先生である。ま、こんなところで立ち話もなんだから一緒に昼飯でも食おうぜ、挨拶代わりに馳走するよ」

「いえ、あなたにそんなことをしていただく由縁はございません」

「お近づきの印だから気にするな。どうせお前さんは貧乏だろ」

「どうして私の懐具合がおわかりなるのですか」

昇太郎の指摘に、章はぎよつとして言った。

「そんなこと、『早見えの昇太郎』殿にはまるっとお見通しよ。そんなつんつるてんの服しか買えないんだもの、推して知るべしだろ」

「しかし……」

「いいからいいから。頼みごとをされるんだから、馳走になっておけばいいんだよ」

なおも逡巡しゆんじゆんする章に、昇太郎の隣に控えた奥医師の松本良甫が言う。

「私もいつも、昇太郎殿のご相伴しやうばんに与あずかっておりますので、遠慮なさることはありません。それに、馳走になったからと言って、貴殿が負い目に感じることはございませんから」

松本良甫の品のいい言葉に、章はついうっかり、うなずいてしまったのだった。

ふつふつと煮える鴨鍋かもなべを前にして章は、店に来たことを心底後悔していた。

昇太郎は、酒を呑み、鴨肉を食いまくりながら、のべつまくなしに喋り続けた。

「おいらたちは桶町おけまちの足立長雋あだちちやうしゆん先生に蘭語を学んでいるんだが、あそこでは原書を使わず訳本で教えているんだよ。でもおいらのモットーは『非読原書難究其奥旨』っていうもので、要は蘭学は蘭語

で学べっていうんだ。てなわけで足立先生のとこだとおいらの希望は叶わない。そこに高野長英先生が現れたってわけさ。まさに『飛んで火に入る夏の虫』ってヤツさ」

その喩えはちよつと違うのでは、と首を捻りつつ章は言う。

「それでしたら『安懷堂』をお勧めします。あそこには原書が二十冊以上ありますし」

調子よく喋っていた昇太郎が、顔をしかめる。

「それはわかっちゃいるんだが、あそこには嫌味な弟子がいるから嫌なんだ」

章は不思議そうな顔で訊ねる。

「私も今、修学しておりますが、そんな偉ぶった方はわが塾にはひとりもいらっしやいません」と、章は不思議そうな顔で訊ねる。

「そんなはずはない。奥医師の桂川甫賢かつらがわほけんってヤツがいるだろうが」

「確かに甫賢先生はいらっしやいますが、先生は深い学識をお持ちにもかかわらず大変謙虚で、人徳のあるお方です。イヤなヤツというのはお人違いなのでは？」

隣で聞いていた松本良甫が、くつくつと含み笑いをしながら、大きくうなづく。

「私も同感です。奥医師という高い身分ながら、あれほど気さくな方は他に存じ上げません」

昇太郎はむっとした顔で良甫を睨んだ。

「うるさいなあ。良さんは黙っててくれよ。おいらはアイツが苦手なんだから。で、おいらの修学先についてはさて置き、章が長英先生に学ぶっていうのはどうすんだい？」

「私は御遠慮させていただきます」

「あのシーボルト先生直伝で蘭学を学んだ、凄いなんだぜ。しかも先生をお招きする費用は、おいらが引き受けるから束脩代は無用。いいことづくめなのに、どうして断るんだい？」

「あなたに理由を説明する必要はないと思います」

あくまでも頑な章を見て、昇太郎はため息をついた。

「仕方がない。正直に言う。おいらは語学と医学を講義してほしいとお願いで、昨秋、神崎屋の協力を取り付けた上に資金援助までして、麹町の貝坂で『大観堂』の開塾を手伝った。なのに長英先生は希望した講義を全然しやがらない。最近は医術はおざなりで、西洋の文明を研究して済生利民の実を挙げるため、やれ国防だ、開国だと大ボラばかり。だから章みたいに学識の深い者に、大先生にちよつくらお灸を据えてもらいたいんだ」

「それはお困りのご様子。しかし私は関わりたくありません。重ねてお断り申し上げます」

「世に鳴る傑物・高野長英を、ひと目見てみたい、とは思わないの

かい？」

「ええ」

「どうしてそこまで長英先生を毛嫌いするんだい？ 昔、何かあったのか？」

しつこく問い詰められて、章はうんざりする。だが、ここまで来たら最後まで説明するしかないか、と諦めて口を開いた。

「私は高野長英というお方が、信用できないのです。大恩ある師、シーボルト先生が大変なことになった時、ためらわずに遁走した^{とんそう}のは、弟子として礼を欠きます。狷介^{けんかい}で偏屈^{へんくつ}だという世評もある長英殿は、暴虎馮河^{ぼうこひやうが}の類^{たぐ}の方に思えます。というわけで、これにて失礼します」

章は立ち上がり一礼すると、そそくさと座敷を立ち去った。

「駿馬に逃げられてしまいましたね」と松本良甫が微笑して言う。

「ウワサには聞いていたが、あそこまで堅物^{ちつせく}だとは思わなかったよ。

あんな風に四角四面に生きたら早晩、窒息^{ちつき}しちまうよ。長生きはずきない性質だな」

「私の目には、筋を通す、背筋の伸びた好青年に映りましたけど。

まあ、昇太郎殿と比べたら、大概の人間は四角四面に見えますからね」と言われた昇太郎は、顔をしかめる。

「何てことを言いやがるんだよ、良さんは。しかし惜しいことをし

た。自由奔放に筆を走らせ、思うがままの絵を存分に描く長英先生ほんぼうと、謹厳実直が袴さんげんじつちよく かみしもを着て歩いているような章をぶつけたら、さぞ面白い見物になっただろうに。それにしてもこんなに旨そうな鴨鍋はしに、箸もつけずに退散するとはとんだ野暮天やぼてんだぜ」
そう言うと、昇太郎は鴨肉を三枚一緒に箸でつかみ、口に放り込んだ。

夕刻。鴨鍋を食べ終えた昇太郎と良甫は連れ立って、麴町・貝坂へ向かった。

そこには昇太郎が立ち上げに協力した、高野長英が主宰する『大観堂』がある。

道々、右手に提げた酒徳利しゅつくりをぶらぶらさせながら、昇太郎がぼやく。

「あーあ、とんでもないスカを掴んじまったなあ。長英先生は見栄えはいいわ、弁は立つわと、実にご立派な御仁だが、おいらたちの望みを聞く気が全くないよな。これじゃあわざわざ神崎屋の協力をお膳立ぜんだてした上に出資までして、開塾に協力した甲斐かいがねえよ。こりゃあ、『早見えの昇太郎さま』にしては珍しく、見切り時を間違えたかな。いやあ、参った」

「まあ、そうおっしゃらずに。人知れず徳を積む、というのも大事

なことだと思えますよ」

「陰徳いんとくねえ。おいらには最も似合いそうにない言葉だな。だけど考
えたら、医術の根底には諸科学があり、医学は自然科学を基礎とす
る、なんていう重要なことを教えてくれたから、まあ、それでよし
としておくか」

自分に言い聞かせるようにしながら昇太郎が塾の戸を開けると、
いきなり怒声どせいが響いた。

「弟子ども、今日は遅かったな。酒は持ってきたか」

「へえ、ここに」と言っ、昇太郎は手にした徳利を持ち上げる。
途端に長英はご機嫌になる。

「気が利くな。寄越よこせ」と言い、手にしたぐい呑みに注ぐと、一気
に飲み干した。

「それでは、本日こそは蘭語のご教授をしていただきたく……」と
昇太郎が言いかける。

長英は、ふん、と鼻先で笑う。

「今さら貴様きさまら如ごときが、半端な蘭語を身につけて何になる。長崎に
は大通詞おおつうじがおるし、江戸には蘭語の達者な連中がわらわらいる。そ
いつらを通詞としてこき使えばよいのだ」

そう言っ、長英はふんぞり返る。

「重要なのは国家の行方、海防で諸外国の干渉を押し返すことだ。

このままでは日本は沈んでしまうぞ」

昇太郎は吐息をついた。

そんなことは重々承知しているが、今の昇太郎が主張したとて、誰も耳を傾けないだろう。

——それを実現するためにも、今のおいらは蘭学の地力をつけるしかないのになあ。

そんな昇太郎の気持ちなど、意に介する様子もなく、長英は滔々と続けた。

「貴様らのように医学だ蘭学だ、と喚き立てる連中と違い、ここには国を守ろうという気概ある国士が集まりつつある。絵師で儒者の渡辺崋山、小関三英、鈴木春山の面々と世を憂う社中を開こうと考えている。貴様らも当然、参加するだろう？」

「おいらたちは、そんな大それたことは望んでおりません。蘭語を学び、医術を向上させたい一心です。先日、先生が執筆なされた『西説医原枢要』みたいなのもっと読みたいのです」

「まあ、あれが名著であるの見抜いたことは、褒めてやろう。何しろ日本初の生理学の書だからな」

「伊東玄朴殿も同じお考えだそうです。玄朴殿は大層羽振りがよろしいようで、和泉橋通の下谷御徒町に医院を移そうとお考え中ですよです」

「肥前ひぜんの百姓ひやくしやう上がりの滝野玄朴たきのが、お大尽だいじんになつたもんだな。アイツの蘭語の学しやくとびは尺取り虫しゃくとりむしみたいいにのろくて、『芋虫玄朴いのみたでんじ』とからかつたもんだ。なのに長崎通詞いのみたでんじの猪俣伝次えもん右衛門殿えもんの下僕しもべとなつたおかげで鳴滝塾なるたきじゆくにもぐりこめたんだ。シーボルト先生の江戸参府さんぷに先立ち、師てらと娘むすめの照殿てらと出発しゅつぱつしたが、途中で猪俣殿えもんが病死びやうじしたので、照殿てらを託たくされたのよ。シーボルト先生の愛弟子あいでしという触れ込みで開業かいぎやうし、照殿てらを娶めとつて猪俣家えもんの七光しちかうりも加えたもんだから、実力じつりき以上に嵩上げかさあげされているのさ。シーボルト事件しーぼるとじけんは滝野たきのから伊東いとうに改姓かいせいしてちやつかり逃れるセコさだし、蘭語らんごの力ちからも大したことがない。そのうちメツキが剥むがれるだろうよ」

鼻先はなで笑わらうと、長英ちやうえいはごろりと横よこになり、高いびきをかき始めた。

しばらく待まちつたが、長英ちやうえいが目を覚さます気配きはいはない。二人ふたりはその場ばを退出しゅつだいした。

帰途きとの道みちすがら、昇太郎のぼりたろうの愚痴ぐちは止とまらない。

「それにしても、あの高慢かうまんちきな態度たいどはなんとかならんのかな。あれでおいらと同じ年としつていうんだから、やんなつちまうよ。確かに蘭語らんご力ちからやものごとの本質ほんしつを見抜みぬく力ちからは大おほしたもんだけどさ。おいらは長英殿ちやうえいには、いつまで経たつても追おいつけそうにないな。なんとも悔くしいねえ」

良甫りやうふはにっこり笑わらう。

「昇太郎殿の蘭語の力は、確かに長英殿に遠く及びません。けれども昇太郎殿には人を惹きつけ、巻き込んでしまう魅力があり、それは長英殿より優れた資質だと思います。きっと長英殿よりも、大きなことを成しとげると思いますよ」

昇太郎はご機嫌になって、にまにまと笑い、良甫の肩を抱く。

「良さんのそういうところが、おいらは好きなんだよ。生まれた時間も場所も育ちも違うけど、墓は隣同士にしような」

「いきなり、縁起でもないことを……」と言いなながらも、良甫は悪い気がしなかった。

年が明けて、天保四年（一八三三）。

困窮こんきゆうしていた章の生活は突如とつじょ、好転した。

父・惟因これよりが江戸蔵屋敷勤めになり、江戸にやってきたのだ。このため章は足守藩の蔵屋敷に住まえることになり、経済的に相当楽になった。

その少し前に章はローゼの「人体生理学書」を完訳し、「人身窮理じんしんきゆうり学小解がくしょうかい」と題した。

章はすでに「安懷堂」と「日習堂にっしゅうどう」の両方の蘭書を読破していたので、もはや信道の元には、この駿馬に与える教材がなくなっていた。そこで信道は自分の師である宇田川玄真うだがわけんしんの塾を紹介した。

老齡の宇田川玄真はひよつと顔をした、剽軽な好々爺ひょうきん こうこうやだった。章は天游のところで、彼の著書を多数読破していたので、初めて会った人のように思えなかった。

孫弟子にあたる章を、本当の孫のように可愛がった玄真は、同じくんかい訓戒を何度も繰り返した。

「一心に勉学に励み、決しておなごに溺れてはならん。儂は昔、杉田玄白先生の養子に迎えられたが、放蕩がひどく勘当された。その時に、お前の師匠の義理の父上である稲村三伯殿、ああ、あちらでは海上随鷗殿うながみずいおうだったか、その随鷗殿が手を差し伸べ兄弟にしてくれ、師の宇田川玄随げんずいの養子にしてくれたのだ。以後、心を入れ替え勉学に励んだため、儂の今日がある。だが回り道は避けた方が賢い。よいな、女郎に入れ込むのはほどほどにしておけよ」

「かしこまりました、肝に銘じます」

そう答えた章は、そういうことは私には杞憂きゆうなのだが、と苦笑を押し隠した。

宇田川塾は多士济々たしさいさいだった。養子の宇田川榕庵ようあんは現在の化学にあたる舍密学せいみや植物学を主にして、すでにその名は蘭学界とせうに轟いていた。また、信道の兄弟子にあたり、章の実家がある足守藩とは地理的に近い津山藩医つやまの箕作阮甫みつくりげんぼにも師事した。先輩で十歳上の「長州の青木三兄弟しめう」の長兄・青木周弼しゅうすけとも意気投合した。

すべてが順調に流れ始め、章は晴れ晴れとした気持ちで毎日を過ごしていた。

この頃、江戸では「蘭学の三大塾」と称される学塾が勢威を伸ばしていた。

第一に文政十二年（一八二九）、坪井信道が深川に開いた「日習堂」である。大川のほとりにあり、章が通う「安懐堂」のすぐ近所にある姉妹校だ。

第二は天保三年、外科医として名高い戸塚静海が茅場町に開いた塾だ。

そして第三は今年、和泉橋通御徒町に華々しく開塾した、伊東玄朴の「象先堂」である。

天保四年のこの時、鳴滝塾で同期の戸塚静海は三五歳、伊東玄朴は三四歳。坪井信道は彼らより五歳年上の三九歳だった。

昇太郎より四つ、章より十歳上の蘭医・伊東玄朴は、高野長英には酷評されていたが、かなりの辣腕家らつわんかだった。農民の出自で十六歳で医を志し、長崎通詞の猪俣伝次右衛門に蘭語を学び、シーボルトに師事したことから開運のきっかけを掴んだ。

文政九年（一八二六）、浅草で蘭学を教え、下谷の御徒町で医業を開業した。すると門人が殺到し津田真一郎、武田斐三郎、大石良英、青木研蔵けんぞうなど俊英いしゆが蝟集した。

章も信道に勧められ、「象先堂」の門を叩いている。

佐賀・鍋島藩なべしまの侍医・大石良英が入門すると、すでに在塾していた長州の青木三兄弟の次男・青木研蔵と、一時籍を置いただけの緒方章を「象先堂の雪月花せつげつか」と並び称して触れ回り、塾の宣伝に励んだ。

彼は外連味けれんみたつぷりの商売人でもあったのである。

やがて玄朴は幕末の医業の中心人物となり、章とは深い関わりを持つようになる。

一方、玄朴と並び称された戸塚静海は対照的だ。遠州掛川藩えんしゅうかけがわの藩医の子として生まれ、玄朴と同時期に鳴滝塾に学んだ。シーボルトが国外追放されると、主を失った鳴滝塾の後事を託され二年間塾頭として頑張った。鳴滝塾が閉鎖されると江戸に出て、浪人の身で蘭学塾を開く。

するとシーボルトの代講のようだと評判になった。だが塾には名前を付けなかった。

諸藩からの藩医の招請しょうせいも断り続けたが、薩摩藩さつまの島津斉彬しまづなりあきらの熱心でしつこい勧誘に音を上げ、ようやく薩摩藩医に召し抱えられたという経緯を持つ。

玄朴は内科、静海は外科に優れ、正反対の性格の二人だったが、不思議とウマが合った。

このように玄朴・静海に章の師・坪井信道を加えた三人が、当世の「江戸蘭学の三傑」と呼ばれていた。

そんな充実した修学をしていた章の前に、あの人物が再び現れたのは、「象先塾」の門前だった。

「象先塾」は、往来に向かつて大きな長屋門を構えている。押し寄せた患者が門前列を成し、その患者を目当てに掛け茶屋まで開かれているという繁盛振りだ。

その茶屋の店先で章は、通り掛かった昇太郎に声を掛けられたのだ。

「よお、久しぶりだな、章。実はおいらんとは二人目の男の子が生まれたんだ。順之助じゆんのすけと名付けたんだが、伊奈家の用人の仕事と、

ややこの世話でちと忙しくて、蘭学はしばらくご無沙汰ぶさたしてたんだ」

ご機嫌な様子の昇太郎から、訊ねてもいない近況を一方的に聞かされた章は、とまどいながらも一応、「それはおめでとうございます」とおぎなりの祝いの言葉を述べた。

「ありがとよ。ところで章はどうしてこんなところにいるんだ？ ひょっとして『象先塾』に鞍替くらがえを考えているのか？」

「とんでもない。私は『安懷堂』と宇田川塾の掛け持ちで忙しいのです。たまたま最近開塾したこの塾の前を通ったのでご挨拶をと思

いまして」

「ふうん、そうだったのかい。おいらは長英殿の『大観堂』を立ち上げた時にお誘いしたんで、それ以後は玄朴先生とはちよつとした知り合いだね。お望みとあらば章を紹介してやるよ」

「いえ、結構です。先ほどお目に掛かりましたので」

実は玄朴が所蔵する蘭書を筆写させてほしい、とお願ひしたところ、形だけでいいから、と強引に頼まれたので、入塾したところだった。玄朴はそうやって弟子の数を嵩ましているらしい。

それでも、伝来の本や処方秘伝として門外不出もんがいふしゆつにしていた漢方と比べれば、秘本を見せてくれるのだから、はるかにおらかな対応だった。

そうしたことを伝えると師・坪井信道は苦笑しながら言った。

——アレは商売人ゆえ。

坪井信道と伊東玄朴は性質が違いすぎるためか、却って終生仲がよかった。玄朴が「象先堂」を建てるにあたって、「日習堂」を建てた遠州屋周蔵とつりよさうという、腕のいい棟梁を紹介したのは、他ならぬ信道だった。

「象先堂」は蘭書の蔵書が多いから、顔出ししてみるといい、というのも信道の勧めだった。

章は、先ほど案内された「象先堂」の内部を思い出す。

表口が二十間、奥行は三十間で小庭と土蔵二棟があるが、敷地のほとんどが一棟の建物だ。一棟の屋敷は奥の間まで畳廊下たたみろうかが一本走り、左右に数十の部屋があり、部屋を隔てる障子しょうじを取っ払えば大広間になる。

章を案内した玄朴は、その間も忙しそうに立ち働いていた。

畳廊下を通りながら患者を診療し、塾生の質問に答え、薬局へ処方の指示を出し、ようやく一番奥の間の書庫兼書齋に着いた。

蘭癖大名・鍋島閑叟かんそうに佐賀藩医に召し抱えられ、蘭学の第一人者と目されていた玄朴は、多数の蘭書を所蔵していた。まさに蘭書の宝庫だ。

けれども章はそうしたことを、昇太郎には言わなかった。あえて言う必要も義理もない、と思ったからだ。会釈をして立ち去ろうとした章の袖を掴み、昇太郎は引き留める。

「そう急せくなよ、相変わらずつれないヤツだなあ。どうせ茶屋に誘ってもこないだろうから、少しだけ立ち話をしようぜ」

周囲に溢れかえっている患者を眺めて、章は首を横に振る。

「私はあなたと話をする時間など、持ち合わせていないのですが」「固いことを言うなよ。お前さんはおいらを嫌っているけど、ほんの少し人の話に耳を傾けてみようという度量は、将来大きくなるためには必要だぞ。もつともそれはいつもおいらが良さんから、口や

かましく言われている説教だけだな」

「わかりました。では、少しだけなら」

「そうこなくっちゃ。まずは以前、章に提案した、長英殿の『大観堂』の建て直しについてだけど、おいらと良さんは見切りをつけた。

大先生は『尚しょう齒しかい会』という憂国の社中を作り、世直しの提言に夢中になっちまってね。こちらの玄朴先生も同じ意見さ。ま、潮時だな」

「そうですか」と章はそっけない。

「それで、今、おいらがどうしているか、聞きたいか？ 聞きたくない？ そんなこと言わずに聞いてくれよ。おいらは素晴らしい抜け道を見つけ出したんだ。江戸の三大塾に負けず劣らず、蘭学を極める早道なのさ。『象先堂』なんて全然、目じゃないぞ。どうだい、詳しい話を聞きたくなってきただろう？」

「蘭学を極める」という言葉にこころを動かされた章は、気がつくとうなずいていた。

「よしよし、やっと聞く気になったようだな。章も長崎屋は知っているよな？ 実はおいらは江戸参府したシーボルト先生に、長崎屋でお会いしたことがあるんだよ」

「私も昔、浪速なにわの銅座どうざで御目通りおめどおしたことがあります」

「そいつは奇遇だな。まあ、いいや。シーボルト先生がドジを踏んだせいで、蘭館長の江戸参府に対する江戸奉行の監視うけぞりは厳しく、こ

こ数年来、江戸の蘭学者は蘭人ときき合えていない。信道先生もそうだろうか？」

章がうなずくと、昇太郎は滔々と続けた。

「ところがぎつちよん、江戸で長崎の蘭学を学ぶ抜け道があったのさ。蘭人が江戸参府しない年でも、蘭人の献上品を持参するため、長崎の通詞はやってくる。しかも蘭人がいないから奉行の監視も厳しくない。ある意味やり放題で、おいらは長崎の大通詞、末永すえながじんぎ甚左衛門殿えもんの弟子にしてもらった。そこで耳よりの話を聞いたんだが、聞きたいかな？」

悔しそうにうなずく章を見て、昇太郎はいたずらっぽく笑う。

それから真顔になって、周囲を見回し声を潜めた。

「長崎に留学に行く好機が来たんだそうだ。これまでシーボルト事件で厳しくなっていた蘭学者への押さえつけも緩やかになってきた上に、来年着任する予定の商館長がかなり学識深い人物だという噂がある。新しい商館長が来ると当座、長崎奉行や通詞は忙しくなるから、その前に長崎に馴染なじんでおくことが重要で、そうすると来年の新年頃が一番いいんだとさ」

話を聞いた章は愕然がくぜんとした。

なんとということだ。あと九カ月しかないではないか。

そして腕組みをして考え込んだ。宇田川塾で読んでおかねばなら

ないと考える書は残り五冊。一心に励めば、半年あればなんとか読み終えられるだろうか。

そんな章を、ふしむろで懐手で眺めた昇太郎は、にやにやした。

「どうやらその気になったようだな。なあ、章、おいらと一緒に長崎に行こうぜ」

その呼びかけには答えず、章は訊ねる。

「どうしてあなたはそんな大切なことをわざわざご親切に、私に教えてくださるのですか」

すると昇太郎は、あつげらからんとした口調で言う。

「それは章が優秀だからさ。優秀な人間が行くべきところに行つて、多くを学び取る。それはお国のためになる。もちろんおいらも気構えは同じだけど、こういうのは仲間が多い方がいい。ちなみにおいらは、足立塾の新米を連れて行こうと考えている。初学者だが素直でなかなか筋がいいヤツなんだ。そういえばどことなく章に似たところがあるよ。というわけだから、来年の春には長崎で、どっちが蘭学を早く極めるか、勝負しようぜ」

章は首を左右に振る。

「学問は競い合うものではありません。私は自分が納得するように勉強に励むだけです」

「かあ、相変わらずお固いなあ。むこうに行ったら嫌が応でも、お

いらと競争になるんだぞ」

そう言うと、昇太郎は真顔になる。そうして、ぐっと前のめりになつて、章の顔を見つめた。

「おいらは本気だぜ。足枷あしかせだった伊奈家の御用人の職は義兄やまうちの山内とよき豊城に譲り、長男の惣三郎そうさぶろうは山村家の養子にくれてやった。ついでに家内と次男の順之助の面倒も見てもらうことにして、先妻の娘ふたりは親父殿おやじに任せる手筈てはずをつけた。これでおいらは自由の身、御用人の雑事をしながら学んでいた今までと違い、思う存分学ぶことができるってもんさ」

そう言い放つと、昇太郎は天井を見上げて、続ける。

「おいらは負けるのが大嫌いだね。章がその気にならなければそれはそれで結構。楽に勝たせてもらうだけさ。それに今の長崎には……いや、なんでもない」

昇太郎にしては珍しく、最後に曖昧あいまいに言葉を濁にごした。

その時、彼の胸をよぎったのは『まあ、コイツにそこまでサービりんしよくスしてやる義理はないか』という、彼にしては珍しい、吝嗇りんしよくめいた気持ちだった。

「それじゃあ、次は長崎で会おう」と片手を上げてその場を立ち去った。

その時、昇太郎は、参府をした長崎通詞に、ついに完成した蘭和

辞典「ゾーフ・ハルマ」を見せてもらったばかりだった。以前の「江戸ハルマ」との違いは一目瞭然だった。

単語数は大して変わらないが、例文が豊富に記載されていたのだ。今回の参府は製本された「ゾーフ・ハルマ」を五組、幕府に献上するのが大きな目的だった。

島津家御用達の高級な紙に筆写し、三三部しか作成していない蘭和辞書は大変高価で、普通の蘭学者には高嶺の花になるだろう。蘭学の潮目は大きく変わる、と昇太郎は直感した。

一方、挑発された章の胸には、敵愾心と負けん気がむくむくと湧き上がってきた。

それは章にとって、たいそう珍しいことだった。

——あの方は、どうも苦手だ。変にこころをかき乱されてしまう。そう思った章だが、昇太郎が伝えてくれた情報は、有益で貴重なものだった。

章は人混みに紛れて見えなくなっていく昇太郎の背に、深々と頭を下げた。

天保五年（一八三四）二月。慣例の商館長の江戸参府は、到着直前に起こった神田佐久間町出火の大火によって、定宿の長崎屋が焼失してしまったため、浅草寺に投宿となった。

このため通常の蘭学者たちとの交流は大幅に制限されてしまった。その頃の章は宇田川玄真の元で修学に励み、いよいよ江戸で盛名を高めていた。そして長崎留学を見据えて帰藩する準備を、着々と進めていた。

ところが順風満帆に見えた行く末に翳りが見え始めた。

まず、十二月に師・宇田川玄真が六六歳で死去したが、つまずきの始まりだった。

翌天保六年（一八三五）一月、章は師の遺言により「遠西医方名物考補遺」に追記する「度量衡換算表」の翻訳に専心した。玄真のその著作は「西洋の医方」、つまり薬物を紹介した書だった。だが薬量は身体からだの大きい西洋人に合わせたものだったので、日本人には過量気味だった。

なので「度量衡換算表」は、日本人に適量を投与するために必須の補遺だった。翻訳する量は少ないものの、何よりも正確さが要求される、気を遣う仕事だ。

死の床とこにあつた玄真は、弟子の中で誰よりも信頼していた章に、大事を託したのだ。

章の蘭語の実力が推し量れようというものである。

だが章に託されたのは、そのことだけではなかった。師の遺作を完成させることも任されたのである。

蘭医学の基本は、第一に人体の仕組みを知る解剖学、第二に身体の仕組みと病気の成り立ちを理解する生理・病理学、そして第三に治療に用いる薬の処方を中心とした内科診断学という三本柱だ、と言われていた。解剖学と処方の訳書はそこそこ充実していたが、その間をつなぐ生理・病理学の良書は欠けていた。そこで玄真は、入手可能な病理学書を編訳して、三本柱の残りの一本を刊行したい、という野望に燃えていた。

そのため玄真は愛弟子の青木周弼に「フーフェラント」の病理学書を、章に、やはりドイツ人の「コンスブルッフ」と「コンラジ」の病理学書をそれぞれ翻訳させ、折衷して編纂を続けていた。ところが半分も書き終えないうちに、玄真は死去してしまった。

「原生（生理学）」と「原病（病理学）」という医学の基本となるふたつの領域の仕上げの編纂を委ねられた章は玄真の遺稿をもらい受けた。

そうして、当時日本に輸入されていた欧州の病理学書、治療書に加え、化学、物理学書、内科・外科の医学書も参考に補訂を重ねた。

後になって、長崎に行っても章は、亡き師のこの頼みを忠実に果たそうとした。

けれども恩師の死に誠実に対応したことによって、章の帰郷はほんの少し、遅れてしまった。そしてその僅かな遅れが大きなズレ

となり、その後の章の人生に大きな影を落としていったのだった。

*

天保七年（一八三六）二月、江戸での修学を終えた章は、故郷の足守に帰った。

江戸蔵屋敷に勤めていた父・惟因も帰藩することになり、一緒に江戸を退去したのだ。

帰りの道中は父と一緒に、章にとって親孝行にもなる楽しい旅だった。

足守で一息入れたらすぐに浪速に行くつもりだった。師・天游に自分の進境ぶりを、一刻も早く見てもらいたかったからだ。さりとて久しぶりにお目に掛かった母への孝養も尽くしたいので、章は足守でたっぷり過ごすつもりでもいた。

矛盾していたが、どちらも本心だった。

そんな風にして久しぶりの実家で寛ぐと同時に、これからの医業に気合いを入れていた章の元に、早飛脚はやびきやくが送られてきた。

章は呆然ぼうぜんとした。天游が危篤きとくだという。

章は直ちに浪速に向かった。だが師の臨終りんじゆうには、間に合わなかった。

浪速に到着した章は、大勢の門弟もんていたちに囲まれた師の亡骸なきがらにまろび寄った。

「天游先生。どうして私が帰ってくるのを待っていてくれなかったのですか」

章は人目も憚はばからず、天游にすがって泣いた。天游は微かに微笑ほほえんでいるように見えた。

気丈なさだは医院を閉め、泣き濡れていた。

「あの人は稼いぎもない穀潰こくつぶしで、宇宙を夢見るばかり。けど、あてはあの人がいなければ生きていかれへん。川に身を投げるつもりはあらへんけど、こころは宙に身投げしたようなもんや」

章は、さだの言葉を聞いて、はっと目を見開く。自分まで同じように泣いていてどうする。

「今こそ師匠にご恩返しさせてください。私は江戸で流行はやりの蘭医学を修得して参りました。坪井信道先生のお墨付きです。中医院と『思し々し齋さい塾』は、私がお支えます」と章は涙をぬぐい、きつぱりと言った。

すると、さだは、はっと顔を上げた。

「それはあかん。章が戻ってきたら引き留めてはならん、と、死の床でうちの人は言うとした。江戸で医術と蘭学を磨き上げて戻ってきたら、間髪かんはつ入れず長崎に行つて勉学に励め、そうすれば章は凄

学者になれる、とそればかり繰り返して……」

さだは涙に暮れ、最後まで言えなかった。

章は胸を張って、きっぱり言う。

「医院は私が手伝えば何とかあります。『思々齋塾』については、当座は私がやります。半年、お時間をいただければ、その間に万事、整えてみせます」

さだは目を見開いた。そしてなにか言おうとして口を開いた。

その機先を制するように、章は続けた。

「何もおっしゃらないください。先生と奥さまは私にとって浪速の父母、ここは私の家です。奥さまは昔、私にそう言ってくださったはずでしょう。子が親に尽くすのは当然のこと」

章の断固たる口調に、さだは何も言えなくなってしまうた。

しばらくして、ぽつんと言う。

「ありがとう、章。そんな風に言ってもらえて、少しほっとしたわ。ほんならわがままついでに、もうひとつお願いがあるんや。できれば耕介も一緒に長崎に連れていってくれへんか。このままではあの人の『思々齋塾』がのうなってしまう。それだけはどうしても嫌なんや」

出会った頃は幼な子だった耕介も今は十代の少年になっていた。

その願いは、さだにしてみれば至極当然なことだったが、それは途

方もない重荷に思われた。

章は江戸に修学した時の苦勞を思い出す。おそらく長崎留学の苦勞はあの比ではない。自分の身ひとつでも、かつかつになるのは目に見えていた。そこに年若い遺児を同行して、果たして生活が立ち行くだろうか。だが章は躊躇ちゆうちゆうせずに答えた。

「わかりました。長崎に行く時は必ず、耕介さんをお連れします」
それから一週間、章は八面六臂はちめんろくつひで動き回った。

いい加減で日々の暮らしは行き当たりばったり、大酒を嗜たしなんだ天游はちよこちよことあちらこちらに小さな借財を残していた。それらをまとめて引き受けてくれる商人を探した。

天游てんしんらんまんの天真爛漫さは浪速の人々に愛されていたし、こうした金銭の交渉事には父・惟因というお手本があった。

師を一途に想う章の気持ち伝わり、浪速の豪商たちに章の真つ直ぐな気性を印象づけた。

この若者のために一肌脱いでやろう。豪商たちは誰もがそう思った。

その一方で、塾生に蘭学の講義をしつつ、天游の遺稿をまとめた。
さだと話し合い、「中医院」と「思々齋塾」は従弟の伊三郎いさぶろうに継いとしこいでもらうのがいいだろう、という結論に達した。

果たして自分でできるだろうか、と伊三郎いさぶろうが躊躇ためらったので章は、

浪速の蘭学の大御所である「絲漢堂」の橋本宗吉（そうきちょう）大師匠に相談した。

「伊三郎殿は、天游に協力してあの『把而翁湮（ぱるへいん）解剖図譜』の精巧な図版を作った腕を買われて、江戸で『重訂解體新書』の解剖図も作ったお方や。そんじよそこらの蘭医をはるかにしのぐ立派な学識の持ち主やさかい、『思々齋塾』を継ぐのは、全く問題あらしまへん」

その言葉に背を押され、伊三郎が「思々齋塾」を引き受けてくれた。

こうしてようやく梓組みはできた。残る問題は金子だ。

その解決策を暗中模索していた章はそこで、彼の人生に終生寄り添う、運命の女性と出会うことになる。

天游の四十九日には、浪速の蘭学者や門弟が大勢集まった。

恙（つつが）なく法要を終え、御齋（おとき）を供していると、章の側に年配の男性が寄ってきた。

豊かな鬚（ひげ）を蓄えた、風格のある面持ち。骨太の堂々とした体つきである。

「あなたが章さんですか。天游さんからお聞きしておりましたが、確かにご立派なお方ですね。僕はあなたの弟子にあたる、億川（おくかわひやう）百記（ももき）と申します。以後、お見知り置きを」

重々しい容貌と異なり、言葉遣いは洒脱しゃだつで軽妙な調子だった。章は酒を勧められたが、にべもなく断った。

「私は飲みません」

そんな章を見て、気分を害する様子もなく、百記はにこにことうなずいた。

「学問をやるなら酒に時を盗ませてはあきまへん。その点だけは天游さんのいけないところでした。斗酒としゆを辞さず、のおおらかさが人を惹きつけたのも確かですが、それによって命を縮めてしまった。儂と同じ年だというのに、惜しい人を亡くしました」

確かに五二歳はまだ若い。

だが章が驚いたのは、百記が師匠と同じ年だということだった。それなら、四十代後半になってから、天游に弟子入りして蘭学を始めたことになる。

「そのお年で蘭学を始めるのは、大変なご決心ではありませんか」
章がそう水を向けると、百記は大きく首を左右に振る。

「いやいや、儂にとつて蘭学は道楽やえのようなものでしてな。若い頃、子どもを五人、幼くして亡くしましてな。名塩なじおには医者がおらんかったのです。なので娘の八重やえが生まれた時、この子だけはちゃんと育て上げたい、そのために医者になろうと一大発心しまして。浪速で漢方を学び、今は浪速から徒歩一日の名塩で医の真似事をしてお

ります。そんな時、道修町の薬屋で輸入したサフランを見つけまして、『小児薬王 むしおさへ』という丸薬をこしらえましたらこれが大当たりしました。使用人の熊太郎には、浪速で薬問屋を開かせ、名塩屋と名乗らせました。そのうち、なぜサフランが効くのか知りたくて、天游さんに教えを請うたのです」

老いてなお、たゆまない向学心は立派なものだ、と章はしみじみと目の前の男性を見た。

「章さんは長崎留学をなさりたいのだとか。よろしければその費用、儂が用立てましょうか？」

驚いた章は、あわてて両手を振って言う。

「ありがたいお話ですが、見ず知らずのあなたにそこまでしていただく謂われはございません」

「遠慮なさる必要はあらしまへんで。これは天游さんに頼まれたんです。死の床で、なんとしてもあなたを長崎に行かせたい、としきりにおっしゃられたので、お側にいた私そばがつい安請け合あひいしてしまったのや」

「しかしですね……」となおも躊躇う章に、億川百記は、にこにこ笑って言う。

「実はこの話には裏がありますのや。儂には先ほど申し上げたように、この子だけはちゃんと育てたいと願を掛けた娘がおりまして。」

幸い八重は無事に丈夫に育って年頃になり、親の欲目ながら氣立てもよく、『名塩小町』と呼ばれるような、そこそこの器量良しにもなりましてな。そこで天游さんにお婿むこはんを見つけてくれるよう、お願いしとったんです。そしたら天游さんは『八重さんには章がいい。ワテとさだのように、お互い認め合う夫婦になるぞ』と言われまして。以来、あなたがお戻りなられる日を、首を長くして待っておったわけでした」

章は何も言えなかった。何をどう、答えればいいというのだろうか。蘭学の修学で精一杯の日々。独り立ちなどまだ遠く、嫁取りよめなど考えたことはなかった。

江戸の師匠の坪井信道は、蘭学塾を開いた翌年の三六歳になるまで、妻を娶らなかった。

蘭学修行とは、それくらいの覚悟が必要なのだ、と章は思っていた。

だが気がつけば章も二六歳、身を固めてもおかしくない年頃、いやむしろ武家としては晩婚とさえいえる。そのためか、先だって足守の実家に帰った時には母に縁談を勧められた。

思いもよらないことだったので、その時はあっさり断ったのだが。だが師・天游の「ワテとさだのような夫婦になれる」という言葉には心が揺れた。

それは章が初めて天游夫妻と会った時からずっと、密かに願っていたことだったからだ。

思い惑う様子の章を見て、億川百記があわてて言う。

「是非嫁にもろてください、などと言っておきながら、肝心の本人をお見せしないのでは気が利きませんでしたな。おーい、八重」

百記が、おさんどんで忙しく立ち働く女衆に向かつて声を掛ける。

へえ、と答えた少女はうつむいて、前掛けを外しながら小走りで百記の側に寄り添った。

「八重、いつもお話ししている、緒方章さんや。ご挨拶しなさい」

「八重と申します。よろしく」

鈴を転がすような声が章の胸に鳴り響く。

姉さん被りの手ぬぐいを外すと、少女はうつむいていた顔をすつと上げた。

まっすぐに章を見つめる視線がぶつかり、章は息を呑む。

目の前であつと、花が開いたような心持ちがした。

「八重さん、お膳ぜんを運んでもらえまへんか」と女衆から声が掛かる。

へえ、ただいま参ります、と答えた八重は、会釈をして手ぬぐいを被り直した。

「すんまへん、台所をお手伝いしてきます」

八重は軽やかな足取りで立ち去った。

その後ろ姿を目で追う章に、億川百記は言う。

「嫁の話はひとまず置いておくとしましても、章殿が今からやらねばならないことは、直ちに長崎に留学すること、天游さんの息子の耕介さんを長崎留学に同行させること、さださまの医院を安定させること、思々齋塾の経営を成り立たせること、というこの四つですな。それを成すには何が必要だと思いますか？」

「……金子、です」と章はためらいがちに口を開く。

「その通り。先ほど、あなたさまの留学の費用をご用意してしましゅうか、と申し上げました。それだけなら儂ひとりでもやれるだけの財は蓄えています。しかしその四つ一遍いっぺんになると、さすがに荷が重たい。そこで考えたのが頼母子講たのもしこうです」

頼母子講という言葉はかつて父・惟因が藩の借財を返済するため金策ほんそくに奔走していた時に、小耳に挟んだことがあったが、章は詳しいことは知らなかった。百記は要領よく、手短かに概要を説明する。

「皆で金を出し合い、親と呼ばれる者が最初に使う、次回は別の人が使い、お金を出した者たちが一回りするまで続ける、という寄り合いです。最初の親を章さんがやり、集まった金で留学すればいい。終わったら次の頼母子講に金を出せばよい。前借りの変種とも言えますかな」

あまりにも急な話に戸惑う章に追い打ちを掛けるように、億川百

記は続けた。

「儂の本業は紙漉きかみすでして、実はここに来る前に章さんの諒承りようじょうを得ずに、紙漉き仲間かみすに声を掛けて話を進めてありますのや。弓場五郎兵衛や木戸六三郎など気心の知れた連中ですので、気安く受けてもらえるうれと嬉しいでんな。なあに、礼には及びません。章さんが医術を極めて戻られたら、名塩の連中が病気になった時に診てもらえれば充分でんがな」

そこへ天游の師、橋本宗吉が寄ってきた。

「ええ話やないか。その頼母子講とは別口で、儂が蘭字仲間らんじから寄付を募ろう。儂は若い頃、師匠たちの好意で江戸の『芝蘭堂』しらんどうに留学させてもらうた。今度はあの時の御恩をお返しする番や。天游の大馬鹿は、師より先に逝いきおった。だがアレは立派な弟子を残した。その弟子を一人前にすることが、何より天游への供養になるやろ」
ありがたすぎる好意に、章は黙って頭を下げた。

夜が更ふけても、御齋はしめやかに続いていた。

酒を好まない章が縁側で、ひとり天游のことを考えていると、背後から声を掛けられた。

「あの、先ほどは父が、いきなり失礼なことを言って、えろうすんまへんでした」

振り返ると、月の光に仄かに白く照らされた、八重の顔があった。
章は驚いて立ち上がる。

「そんなことはありません。お父上のご厚誼にはとても感謝しております。それよりあなたこそ、いきなり嫁に、などと言われて戸惑ったではありませんか。聞けばあなたは十四、私とはひと回りも違います。まあ、お父上が戯れをおっしゃったと思って、お忘れください」

八重は、胸に手を当てた。

「あては、章さまのことを父からいつも聞かされて、お会いする前から兄さまのように思っていました。今日初めてお目に掛かって、思った通りの優しい方だとわかって嬉しかったです」

少女の真っ直ぐな言葉が眩しい。

幼いと思った少女は、章よりもずっと大人だった。
思うよりも先に、章は口を開いていた。

「三年、長崎で修学してきます。戻った時、あなたの気持ちが変わっていないければ……」

章はそこで口をつぐんだ。

八重は佇んだまま、章の次の言葉を待つ。

一陣の風が吹き抜け、葉ずれの音が響く。

章は何も言えず、夜空を見上げる。八重も同じように空を見た。

満月の白い光がふたりを照らした。

満天の星が降るようだ。

翌朝。

章は、名塩に帰る億川親娘おやこを見送った。

朝靄あさむやで煙る街角に、大柄な百記と小柄な八重のシルエットが浮かび上がる。

旅姿の娘は、両手で胸を押さえるような仕草で、お辞儀をした。

その姿は靄の中でぼうと霞かすみ、章は、八重の顔をまっすぐに見ることができなかった。

ゆうべは、なんであんなことを口にしてしまったのか。

自分は間もなく、遠く長崎の地へ旅立つことになる。蘭学修行は過酷で、命を落とすこともあり得た。それなのに、あんなことを言いかけたなんて、無責任すぎる。

同時に、口ごもって最後まで言えなかったことを後悔もしていた。加えて、ひよっとしたら八重とはもう二度と会えないかもしれない。それなら思い切って、自分の想いを伝えるべきではなかったか。いや、絶対に岳を成し遂げ、生きて戻り、もう一度お目に掛かってみせる。

想いを告げるのは、その時だ。けれども八重さんが、自分を待つ

ていてくれるという保証はどこにもない。

そんな風に、章の想いは千々に乱れた。

そんな彼の気持ちも伝わったのか、百記が立ち去ろうとしたその時、八重は立ち止まって振り返る。

そして章の許もとに駆け寄ってきた。

それはあまりにも唐突な不意打ちで、章は思わず目を伏せてしまった。

そこにすっと差し出されたのは、灰色の短冊たんざくだった。

章は顔を上げた。

八重はそれまで胸に抱いていた、一枚の短冊を差し出したのだ。

「それは名塩すで父が梳すいた紙です。それに、あてが一番好きな歌を書きました」

章は受け取ると、短冊に書かれてあった名前を口にした。

「……花香はなか」

「それは、あての、歌を書くときの号です。あては、梅の花が一番好きです」

そう言うと、八重は章に背を向け、急ぎ足で父の後を追った。

遠ざかる小柄な少女の後ろ姿を、章はひたすら見つめ続けた。

その後ろ姿の向こうに、章は洋々たる自分の未来が見えた気がした。

6章 絢爛けんらんたり、長崎 天保七年（一八三六）

夕暮れの丘に、鐘の音が響く。

鳥が鳴きながら、背後の風頭山かざがしらから港の方角へ飛び去っていく。
高台にある境内から西方を望むと、海原に夕陽が沈んでいく。その手前に長崎の街が見える。

青貝細工あおがいざいくのようにきめ細かく入り組んだ街に、灯りがぼんやりと
点り始める。

そこから海に突き出た突端とつたんに、扇形おうぎがたの小島が見えた。

あそこが蘭学の聖地、出島でじまか……

章はそう呟いて、目を凝らす。

やがて夕闇に街並みが沈むと、寒風が吹き始めた。

眼下に広がる長崎の街並みは、三方を山に囲まれた、中洲なかすのよう
な狭い土地だ。

長崎港は日本で唯一、異国に開かれた窓である。

そこから吹き込んでくる異国の風から日本を守るように、風頭山かざがしら
の麓ふもとにはいくつもの寺が、隙間なく連なって寺町を構成し、屏風びょうぶの
ような風よけになっている。

ここ大音寺だいおんじは、長崎で三つしかない將軍朱印寺しゅいんのひとつで、寺町

の寺社の中でも格が高い。

章は麓に広がる家々を眺める。ぽつん、ぽつんと灯りが点り始めた家の、その中のひとつに居を構えていた。

章が長崎に来て、はや一週間が経つ。地役人への届けや、貸家探しなど雑事に追われ、肝心の長崎の蘭学者たちとはまだ連絡が取れていない。

——こんな調子で、私を送り出してくれた皆の期待に応えることができるのだろうか。

見慣れぬ街並みを見ていると、頼りない気持ちになる。

だが章は雑念を払うように、顔を上げた。

夕空には、ひときわ明るく、宵の明星が輝いている。

星が好きだった師匠の笑顔を思い出した。

——天游師匠がつけてくれた名と訣別し、これからは新たな道を歩むため広い庵、「洪庵」と名乗る。その名に相応しく、広く大きな庵に、ひな鳥たちを住まわせ育てるのだ。これからは、私は私の道を行く。

そう一念発起した章は、利休鼠の名塩紙の短冊を、懐から取り出す。

そこには美しい手で、和歌が記されていた。

残りたる 雪にまじれる 梅の花

早く散りなそ 雪は消ぬとも

花香 しるす

藩札にも使われるという貴重な紙に書かれた、大伴旅人の和歌を眺めている章の脳裏には、手渡してくれた少女の面影がよぎった。

再び、大音寺の鐘が鳴った。

頬を撫でる冷たい風に、章は我に返る。

日が落ちて暗く沈んだ港を眺めていると、大坂を船出した日のことが思い出される。

その日、「蘭方医師 中環」と「銅板印刻」のふたつの看板を掲げ、中伊三郎が家督を継いだことを明らかにした、浪速の家の玄関を出た。

天游の遺児の中耕介は、祖父が作り父に伝えられた「江戸ハルマ」を入れた行李を背負い、母のさだに旅立ちを告げた。

岸辺で見送る門人が手を振るのを、章は感無量で眺めた。隣では耕介が、故郷を離れる寂しさに、涙をこらえている。

章はそつと、その肩を抱いた。

大坂と馬関を結ぶ阿弥陀寺船の帆が大きく風をはらんだ。

それは胸の内にある希望が膨らんでいく様のような思われた。

その様子を思い出した章の胸に、様々な思いが去来した。

多くの人の善意のおかげで今、長崎の地に立っている。いや、立たせてもらっている。長崎で学べることを学び尽くして浪速に持ち帰り、その人たちに恩返しをしたい。

それが今の章の胸を満たしている、強い気持ちだった。

そしてその時には、八重殿と……。

章は首を振って最後に浮かんだ妄念もうねんを振り払い、急ぎ足で石段を降りようとした。その時、墓所の塔頭たつちゆうが目に入った。松平康英の名を認めた章は立ち止まり、両手を合わせた。

そして足早に、狭く細い石段を下りていく。

長崎は坂の街、そして石垣の街である。細い水路が碁盤の目のように走り、その上に数多くの橋が架かっている。その様子は章に大坂の街の様子を思い出させる。ただし二つの街の橋には大きな違いがあった。

大坂は木橋、長崎は石橋だ。

章は坂を下りきると、四つ辻を右に曲がる。

大音寺の麓いまじまちの今籠町の町屋を借りて、中耕介と住み始めたのは、長崎に到着して四日目、今から三日前のこと。

ようやく長崎での暮らしに目処が付き、そろそろ修学の手配かこをしなくては、と思いつつ家に戻った。すると、玄関先に立派な駕籠かこがあり、四人の人足が待機していた。

戸惑うように立ちすくんでいた耕介が、心細げに言う。

「この人たちがさつきから、兄さんをお待ちしていて」

駕籠か昇とうちくきの頭目と思しき人物が、頭を下げた。

「オランダ大通詞・末永家のお迎えの駕籠でやんす。お乗りください」

わけがわからないまま、章は家に入り大小を携えると、駕籠に乗り込んだ。

「では参ります」

駕籠揺ゆきがそう言うと、駕籠を持ち上げた。

そして、えっほ、えっほと掛け声勇ましく、出発した。不安げな表情の耕介が、その様子を黙って見送っていた。

駕籠に乗った章の気持ちは高揚していた。人生初めての経験だ。

出世には、とんと無頓着な章だが、駕籠に乗れる身分には仄かに憧れていた。

石畳のせいとか、揺れが酷いのに閉口したが、そんなことを気にしている暇はなかった。

『なぜ、大通詞さまが私を？』

章の頭は、その疑問でいっぱいだった。

長崎の蘭学界と連絡を取ろうと思っていた今の章にとっては、願ったり叶ったりだったが、あまりにも好都合な話に、却って疑心暗

鬼に囚われてしまう。

揺れる駕籠の中で章は、到着してここ数日で知った、長崎事情に思いを巡らせた。

天領である長崎は、日本でただ一カ所の「国際都市」である。行政のトップは江戸から派遣された奉行がいる。

通常は二人体制で、ひとりには江戸詰である。その下には与力よりきが十名、同心どうしんが三十名ほど。代官、町年寄まちどしより、会所かいしよ、乙名おとなと呼ばれる行政担当官には町人が任じられる。

長崎で特殊なのが、通訳の役人がいることである。

これには清国しんの通訳である「唐通事とうつうじ」とオランダの通訳の「蘭通詞」がいて、それぞれが株を持ち、代々の相伝そうでんだった。「唐通事」の方が圧倒的に多く、数は十倍ほどいる。

オランダ人の居留地は国際監獄と呼ばれた、小さな人工島の出島に押し込められていた。

その一方で、唐人は石垣で囲まれた、内陸のかなり広い土地に豪華な館を構えていた。

今は「医」の「蘭方」が有名で目立っているが、「唐通事」の「医」は、幕府の中枢しんを担う「漢方」である。

十七世紀末、蘭通詞の世界に出現した天才が二代前の二大巨頭、吉雄耕牛よしおこうぎゆうと本木良永もときよしながである。吉雄耕牛は蘭医学の大家となり、本木

良永は天文を主とし、「惑星」という単語も作った。

この二大巨頭の薫陶くんとうを受け、通詞から学者に転じて蘭学をまとめたのが、『曆象新書れきしやう』を書いた志筑忠雄しづみただおである。師・中天游の座右の書であり、房総で困窮していた章の生業を立ててくれた、恩義ある書物である。

この志筑忠雄の弟子が、馬場佐十郎ばばさじゆうろうと吉雄権之助ごんのすけの二枚看板だ。馬場佐十郎は江戸に召された後、蝦夷地えぞちの開拓へ向かう。蘭語だけでなく、英語やロシア語まで修得した語学の天才である。片や吉雄権之助はシーボルトに仕え、彼の手足となり献身した。そしてシーボルト事件に連座して獄に入り、病死してしまう。

こうして長崎の蘭通詞の天才の流れは一旦途絶えてしまった。今の長崎蘭通詞の立場は地盤沈下し、しかもオランダは幕府を慮おもんばかつて、医師の派遣を控えているという。

蘭医学および蘭通詞の低迷期、それが章が長崎に留学した時代だった。

それでも代々受け継いできた蘭学の蓄積があったため吉雄家、檜林家ほやし、末永家、猪俣家ほまなど、著名な通詞の後継者たちが蘭医界を支えていた。

地盤沈下著しい蘭通詞と対照的に、この頃「唐通事」界に突如現れた超新星が頼川四郎八えがわしろうはちである。「唐通事」は蘭通詞と比べ、遙かに

厳しく序列が固定されていた。穎川家は通常は大通事になれない家柄だが、彼は今年、四三歳の若さで大通事になった。語学力と人徳を兼ね備えた彼は町人の信頼も厚く、唐通事界を取りまとめる顔役になりつつあった。

そんな中、蘭学の世界で武張っていたのが蘭通詞の名家から別れた分家の医家檜林家の兄弟、暴れ馬・栄建えいけんと静かなる駿馬・宗建そうけんだ。

彼らはシーボルト以来、失敗し続けた痘瘡とうそうに対する白神しろがみ（ワクチン）である牛痘株ぎゅうとうしゅうかきの輸入を成功させることで、一発逆転を目指し、吉雄家、末永家などと連携を図っていた。

もちろん、唐通事もそれを黙って見過したりはしない。彼らは彼らで、清国を通じ牛痘苗なえの輸入を画策していたのである。

だが駕籠に乗せられた章が、そこまでの事情を把握していたわけでは、もちろんない。

やがて駕籠が止まり、幕が開いた。駕籠から下りた章は目を瞠みはる。色とりどりの派手な提灯ちようちんが軒先のきさきに提げられ、真昼まじと見紛うばかりの明るさ。

戸惑う章の側を、派手な着物で白塗りの顔の女性が、お供の男と一緒に通り過ぎていく。

日本の三大遊郭ゆうかくのひとつと謳うたわれた長崎の色町、丸山遊郭まるやまだった。

格子の飾り窓から白粉を塗った女性が流し目を投げ、声を掛ける。
「あら、男前の若いお侍さん、あたいんここに寄ってお行きよ」
むせるような白粉の匂いに咳き込んで、章は目を逸らす。

「緒方章さま、ようこそお越しくございました。こちらへどうぞ」
駕籠の側に立った男性が、先導して章を案内する。

門を入ると、一段高くなっている玄関まで、石畳を踏んで行く。

ぼんやりと灯りが点る赤い提灯の字は、「花月」と読める。

二階に上がると、奥まった部屋の襖が開いた。大きな硝子窓から、
青々とした庭木が見える。

広間の真ん中には大きな朱色の円卓があり、男が二名、座っていた。
た。

章はあまりの衝撃に、目を見開いた。

そこにいたのは、章が苦手とする相手、田辺昇太郎だった。彼の隣には、武士の成りをしているものの、武士には珍しく鬚面の小柄な青年が座っている。

「よっ。久しぶりだな、章。まあ、座れよ」

片手を挙げた昇太郎は、相変わらずの陽気な声で言った。

「大通詞殿のお招きのはずなのに、どうしてあなたがここに？」

「おいらは通詞・末永家の名代なんだよ。去年二月、江戸で弟子入りした大通詞・末永甚左衛門の爺さんの家に世話になっていたんだ

が、半年前に爺さんが死んじまつてな。末永家を出て以後、ここに
住まってる。そうそう、おいらは長崎で名前を変えたんだ。田辺
昇太郎改め和田泰然わだたいぜんつてんだ。和田つてのはお袋の実家の姓なんだ
よ。以後よろしくな」

「奇遇ですね。実は私も長崎で改名しました。章改め洪庵と申しま
す」

そう答えた洪庵は一瞬、顔をしかめた。常に自分と似た動きをし
て、しかもいつも一歩先を行かれる感じがなんとも煩わしい。

「長崎に着いて早々改名するなんて、相変わらずおいらたちは気が
合うねえ。それにしても章、じゃなくて洪庵さんは、やけにグズグ
ズしてたな。長崎での修行を競おうと言っていたのに、半年も出遅
れた上に、お小姓こしやうと一緒に長屋住まい。一体、何があつたんだ？」
「私はそのような約束はしておりません。ですがなぜあなたは、長
崎に着いたばかりの私の事情をご存じなのですか」と薄気味悪く思
った洪庵は、詰なるような口調で言う。

「それはおいおい説明するとして、まずは卓につけよ。再会を祝し
て乾杯しようぜ」

「私は酒は嗜みません。また故なき饗応きやうおうは受けません」

「相変わらず堅苦しいヤツだなあ。ま、そう言うだろうと思ってい
たけどな。だけどこの酒席は長崎蘭学の総元締そうげんじめ、大通詞さまの招しょう

宴だぞ。故なきどころか大義がありまくりなんだぜ。断ったりしたら、章の長崎留学が吹き飛んじまうかもしれないんだぜ」

洪庵は唇を噛んだ。どうしてこんなことに、と思いつつ着座し、杯を受ける。

「偉い偉い。少しは大人になったようだな。では改めて、田辺昇太郎と緒方章殿、もとい、和田泰然と緒方洪庵殿の、長崎での再会を祝して、乾杯」

小声で唱和した洪庵は、苦い菓を飲み込むように杯を干した。派手な着物姿の仲居が、次々に小皿を運んでくる。

「最初にお鰯を食せよ。鯛の胸びれの吸い物だ。長崎名物の卓袱料理は、清国やオランダの連中と付き合うため、席次の上下を考えずに済むよう考え出されたものだから、四の五の言わずに召し上がりがよい」

仲居に代わり膳を説明した泰然は、最後はおどけて役人口調になった。

しぶしぶ箸をつけた洪庵は、その味の深さに思わず瞑目した。

「これは国際都市の長崎の名物料理で、『わからん』料理という」と泰然が説明する。

『わからん』ですか。むしろ、わかりやすそうですが」と珍しく洪庵が軽口を叩く。

「はっ、不調法者の洪庵殿には洒落が『わからん』ようだな。漢字を当てれば『和唐蘭』、つまり日本人、唐人、蘭人の三者で仲良く食そう、という洒落だよ」

それでは「わかららん」ではないのか、と思った洪庵だが、それを言うと、話がこんがらがりそうだったので、黙っていた。

そんな洪庵の前に、造里の皿が置かれる。

その後も湯引き、続いて三品盛、取り肴、満女、焼物と油物の変り鉢、山海の大鉢、豚の角煮の中鉢、煮物、と次々に料理が運ばれてくる。

朱色の円卓の上はたちまち、四角や丸い色とりどりの料理皿で埋め尽くされていく。春爛漫のお花畑のような食卓が、現れた。

これが長崎か、と呟いて一通り箸をつけた後で、洪庵は訊ねる。

「ところで、お隣のお方は、どなたですか」

洪庵は、泰然の隣にちんまりと座っている、身なりはきちんとしているが、それに合わない鬚面の青年を指さして訊ねた。

「おお失敬、食事に夢中でうっかり紹介するのを忘れていたな。コイツは小林杖策といって、江戸から連れてきたおいらの舎弟だよ。小倉藩の侍医の次男坊なんだが、おいらと一緒に長崎に行きたい、というので先に行かせて下準備をさせた。小倉藩屋敷に住んでいたんだが、先日、大石良英殿のところに寄宿させてもらうことになっ

「ただよ」

「なんと、大石先生のお宅に、とは実に羨ましい。大石殿は温厚で度量の大きいお方です」

大石良英は、洪庵が玄朴の「象先塾」に参加した時、長州の青木三兄弟の次男の青木研蔵と共に「雪月花」として賞賛された三傑のひとつりで、洪庵もよく知っていた。

大石良英と青木研像は、元々鳴滝塾の出身だ。そんな彼らと併称された洪庵は、きわめて異質な存在だったと言えるだろう。

洪庵は改めて、杖策の顔を見た。

修学を志す、まっすぐな気持ちに瞳に表れている。

「ところで、先ほどの私の質問にお答えいただいておりますが」「ああ、なぜおいらが章の事情を知っているのかっていう問いだったっけな。その答えは簡単、大通詞と長崎奉行は情報を共有している。だから章の様子も、大通詞の名代のおいらには筒抜けだったのさ。それでは次はこっちの質問に答えてもらおう番だ。章が長崎に来るのがこんなに遅れたのはどうしてだい？」

洪庵は師の天游が亡くなり、事後処理に時間が掛かった事情を説明した。すると泰然はからからと笑う。

「相変わらず要領の悪いヤツだな。亡くなっちゃった師匠なんぞほっぽり出し、さっさと長崎に来ればよかったのに。半年の遅れは致

命的だぞ」

「そんな恩知らずな真似はできません。私はあなたとは違うのです」
すると泰然は真顔になって言う。

「章の言うことはいわゆる『小仁』しょうじんってヤツだよ。『君に忠、親に孝』こうなんて、古くさい儒教の考えが民を縛り、それに乗じて、お上
が民が羽ばたくのを抑え込んだ結果、日本は遅れちまった。
蘭学者もお上に登用されたが多い。玄朴殿なんてその筆頭だな。
その点、長英師匠はトンデモだが、見識は大したものだった。おいらも危うく凡庸な儒学者の理に取り込まれるところだったけど、長
崎に来て目から鱗うろこが落ちたのよ」

洪庵には泰然の語る言葉はさっぱり理解できなかったし、理解したいとも思わなかった。

「それでは、章が今、一番気にしているであろう本題、今後の蘭学
修学について語ろうか」

反感に凝り固まりそうになっていた洪庵は思わず、「伺うかがいます」
と言って居住まいを正してしまう。

泰然は厳おびかな口調になり、言う。

「不本意かもしれないが、章、お前はおいらの手下になれ。そうすれば出島の出入りも自由だ。商館長のニーマン殿は学識豊かで、医学の造詣も深い。それと大きな声では言えないが、商館付の医師に

も直接修学ができるよう、話をつけてやるぜ」

洪庵は驚いて、訊ねる。

「まさか。シーボルト先生の事件後、オランダは医師派遣を控えているとお聞きしましたが」

「は、そんなの表向きたてまえの建前に決まってるだろう。商館員が病気になるたらどうするんだよ。医師の同行は必須なんだよ。表向きは医師は同行していない、ということにしているだけよ」

泰然が持ちかけてきた話は、これ以上ないくらいの好条件に思われた。

ただ一点だけ、泰然の手下になる、ということだけを除いては、ではあるが。

自分の信念を曲げ、意に染まない人物の風下に立つべきなのか。蘭学修学の効果を考えれば、それが最善であることは間違いないだろう。しかし……。

しばらく考え込んでいた洪庵は、顔を上げるときっぱりと言う。

「お話は承うけたまわりました。ありがたくお受けしたいところですが、やはり泰然殿の下に就くことは、私としてはどうしても受け入れ難く、お断りするしかありません」

泰然は手を叩いて、大笑いした。

「ほらな、おいらの言った通りだろ。章つてのは、こういうヤツな

んだよ」

泰然の隣に座った、小林杖策は、鬚面の首を振る。

「信じられんとです。『安懷堂』の緒方章しゃんと言えば、江戸の蘭学者で知らぬ者のない、第一人者。そのお方が、かような愚かしいご判断をなさるとは」

泰然はにやにやして、杖策と洪庵の顔を交互に見ながら、言った。

「まあ、いいさ。これで長崎修学の蘭学修業の勝負は、おいらの勝ちが決定したからな。けど、おいらは気前がいいから、章におこぼれをくれてやるよ。杖策は蘭学を学び始めたばかりだが、なかなか筋がいい。そこで頼みがある。杖策に蘭学の初歩を指導してやってくれないか」

「私が、ですか？」

泰然の本意を図りかねて、洪庵は思わず問い返す。

「そうだ。もちろん、ただで、とは言わない。その分のお代は払うよ」

「大石殿の塾に寄宿し、出島で蘭人に自由に学べるのなら、私の助けなど無用では？」

「長崎ではいいが、コイツもいずれは江戸に帰り、お上に対応しなければならぬ。その時のため出仕心得しやくしんていも教えてもらいたいだ。そんなことを頼める謹厳実直居士の知り合いは、章しかないんだ。

よ」

「ですが結果的に、あなたの世話になるということになるので、やはりちよつと……」

「うーん、どうにも石頭だなあ。それなら章に『ゾーフ』を筆写してもらい、その労賃としてお代を払う。これならどうだ？」

「なんと、あの幻の『ゾーフ・ハルマ』を……」

洪庵は驚愕のあまり、絶句した。

「ゾーフ・ハルマ」は二代前の蘭商館長ヘンドリック・ゾーフ編纂の蘭和辞典である。それは原本のフランソア・ハルマ編の蘭仏辞書「ハルマ辞書」に和訳を加え「ゾーフ・ハルマ」としたものだ。それ以前は「江戸ハルマ」があった。

日本最初の蘭和辞書は収録語数約六万、全十三巻だった。

ところが「ゾーフ・ハルマ」は、収録単語数こそ五万語と「江戸ハルマ」を下回るが、口語を重視して、豊富な例文が掲載されていた。このため全五八巻の大著となった。

ゾーフは「A」から「T」の項まで終えた時、完成を見ずに日本を去り、以後は長崎通詞の吉雄権之助が中心になり共同作業を続けて三年前、ようやく完成させたのだという。

総頁数三千を超える辞書は、筆写の三三部しか流通していない。

長崎奉行を通じ数冊が江戸幕府に献上されたが、幕府は一般向けの

刊行を許可せず、蘭学者の間では「幻の辞書」として垂涎すいぜんの的となつていた。

そんなウワサの「ゾーフ・ハルマ」を、この手に取ることはできるとは……。

洪庵ほんもんは煩悶はんもんした。そんな章を見て、泰然は大笑いする。

「そんなに悩むこともないだろう。あの『ゾーフ』を筆写できるんだぜ。やるしかないだろ」

「おっしゃることは、わかるのですが……」

洪庵は口ごもる。それを見て、肩をすくめた泰然が、諦めたように言う。

「わかったよ。そこまでおいらと関わりを持ちたくないのなら、章への対応は杖策に任せて、おいらは引つ込んでやる。これでどうだ」
半分驚きながら、「ええ、それならば喜んで」と章はうなづく。

それなら洪庵にも、容認できる申し出だ。だが、洪庵は不思議な気持ちになる。

「どうしてそこまでして、私によくしてくださいるんですか？」

その問いは以前も発したことがあったな、と思いつつ、そう訊ねると、泰然はからりと笑う。

「そりゃあ蘭方医が少ないからだよ。漢方医が大手を振っている世で、蘭方医がいがいあつてもしやあないだろう。弱っちくて数

が少ない蘭方医は、団結するしかないのさ」

泰然は両手をぱん、と打って、陽気に言う。

「よっしゃ、これで決まりだな。おいらは引田屋ひけたやに居続けたが、杖策は『ゾーフ・ハルマ』が置かれている大石良英殿の塾に寄宿しているから、洪庵殿にとつても万事好都合だろう」

だがそう言った泰然は、顔をしかめる。

「うーむ、どうも『洪庵殿』という名は袴を着せたようで、堅苦しくていけねえや。やっぱりおいらはお前のことは、これまで通り『章』と呼ばせてもらおう。それでいいよな？」

「ならば私もあなたのことを『昇太郎殿』と呼ばないといけなんでしょうか？」

当然に思える質問なのに、泰然は思い切り首を横に振った。

「おっと、そいつは勘弁してもらいたい。昔から、昇太郎という名前が大嫌いだね。おいらのことは泰然と呼んでくれよ」

なんと身勝手な、と思ったものの、嫌いな人間が自分をどう呼ぼうと気にすることもないか、と思ひ直す。

師匠が善意でくれた着物の悪口を言われることと比べれば、どうということもない。

「わかりました。それで結構です」

「ついでに杖策にも改名を勧めてるんだ。小林の『小さい』を取っ

て、姓は林、名は杖策改め洞海とうかいってんだ。三人揃って長崎での襲名披露ってのはどうだい？」

「どうだい、と言われましても……」

洪庵が首をひねっていると、泰然がご機嫌な口調で言う。

「では、本日の諸々について一本締めと参ろう。皆の衆、お手を拝借」

華やかな朱色の円卓が置かれた座敷に、手拍子が大きく響いた。

「渡り廊下の向こうへ付き合えよ」と泰然が言ったが、嫌な予感があったので洪庵は断った。

「ち、相変わらず鼻のいいヤツ。あつちは『引田屋』、女郎屋なんだよ」

洪庵は、ほっと安堵して、広間を辞去した。

一階に下り玄関を出ると、入口には行きと同じ駕籠が待っていた。

「近いので、私は歩いて帰ります」と洪庵が断ると、「そんなら拙者も途中までご一緒します」と、ついさつき小林杖策から改名したばかりの林洞海がついてきた。

しだれ柳が生えている川に沿った小道を歩きながら、洞海が言う。

『『ゾーフ・ハルマ』の筆写をお引き受けされたのは、とてもよかことでした。洪庵先生も、これでゾーフを手に入れることができる』

ですね」

「いえ、写本は泰然殿のものですので」

「なんと、本気でそんなことば、おっしゃるとですか。三部模写して一部は泰然しゃんに渡し、一部はあなたの手元にお持ちになり、もう一部は売り払って金に換えればよかですよ」

「そんな手があるとは、思いもありませんでした。ご教示、感謝します」

生真面目に礼を言い、橋の中程に立った洪庵を、洞海はしみじみと見た。

「泰然しゃんの言う通り、洪庵先生は杓子定規な方ですたい。ところで洪庵先生が今立たれておられる橋は、何という名前かご存じですと?」

洪庵が首を横に振ると、洞海はにっこり笑って言う。

「思案橋しあんばし、と言うとです。そこは街から丸山につながる道、花街に行こうか戻ろか、思案するのでその名があるとです。もつとも洪庵先生はそんな悩みば、微塵みじんも関係なかでしょうけど」

足下の橋を見る。確かに自分がこの橋で思案することはこの先、二度とないだろう。

橋はいつも、自分を見知らぬ場所へ連れて行ってくれる。今、この橋を渡るとは、自分にとって大きな転機になるかもしれない、

と思う。

洪庵と洞海は翌日の再会を約し、思案橋のたもとで別れた。

こうして洪庵は、泰然の手下になることなく、最大限の利を得た。

だがそれは、泰然の大量あつてのことだ、ということはさすがに洪庵にもわかっていた。

洪庵と洞海が遊郭を辞した後、泰然は渡り廊下を通り、隣の「引田屋」に移ると、花魁おいらんが待つ部屋の襖ふすまを開けた。するといきなり、幼い女の子が泰然に飛びついてきた。

「おっちゃん、お帰り。さあ、遊ば」

「はは、おイネちゃんは相変わらず元気だな。お土産のお菓子だよ」
そう言うと、小さな包みを手渡す。

わーい、と言って、幼いイネは包みをびりびり引き裂いて、中から取り出した砂糖菓子を頬張る。泰然はそんなイネを抱き上げ、座敷の奥に進む。そこには上品な佇まいの女性が、端然と座っていた。

「イネ、泰然さまにきちんとお礼を言いなさい。美味しそうなお菓子でありんすね」

「ええ、最近評判になっている梅寿軒ばいじゆけんの『もしほ草』だそうです。
今日の卓袱料理のお茶請けに出されたものです。よろしければ其扇そのぎ
さまもおひとつ、どうぞ」

「ありがとうございます」と言って口に含んだ女性は、「上品な甘さでありんすな」と呟く。

それから泰然を見つめて、か細い声で言う。

「毎度、お座敷にお呼び戴いて、何もしないというのは大変心苦しくありんす」

「とんでもない。おいらにとつては其扇さまからシーボルト先生や長崎奉行のこと、出島の内部事情を伺えるだけで、十分元は取っております。それにおいらは江戸に、瀧子たきこという女房を残してきております。同じ名前の女性を抱いたと知れば、家内が角を出すでしょう」

「まあ、左様さようでありんすか」と言い、其扇は微笑する。

其扇は本名をおたきと言う。商家の娘だった彼女を診察したシーボルトに見初められたが、出島に出入りできる女性は花魁のみという決まりがあるため、丸山の遊女ということにして、内妻となりシーボルトの許に通ったのだった。

これは名付遊女という仕組みで、一般の遊女とは違っていた。シーボルトが去った後、彼女は町人に嫁ぎ再婚したが、泰然が金に明かし、たつての願いで呼んでいるのだった。

遊女は蘭館に出入りできるので、蘭人の内情に通じていた。蘭学を学びながら同時に遊郭に入り浸ることは、実は情報収集としては

一番効率がよかったかもしれない。

それは泰然にとっては、もっけの幸이었다。

だが父・藤佐が江戸入りする時に用いた、佐藤家代々の直伝の手法でもある。とうすけ

泰然は、修学で蘭通詞、オランダ事情については遊女から情報を仕入れた。そうして蘭通詞の世界に食い込み、最初は蘭通詞のお供として出入りを重ねるうちに顔なじみとなって信頼を勝ち取り、出島に自由に出入りできるようになった。

今ではわずか半年余りで、商館長ニーマンといつでも自由に語り合えるという、特別な間柄になっていた。

ニーマンは巨漢で、常に書物を手元から離さない、学究がくきゆうの徒とのような人物だった。赤ら顔の彼は、自由闊達かっただで恐れ知らずの若者に、外国事情を詳しく語った。泰然はニーマンの一番弟子だった。だから、ニーマンがこっそり外科医を同道していることも、他言厳禁の約束の下、その外科医から直接手ほどきを受けることもできたのである。

そんな風にニーマンの信頼を勝ち得ることができたのも、其扇のおかげだった。

シーボルトの内妻だった其扇は今でも、相当高いレベルで蘭館の内部事情を熟知していたのだ。

泰然はその夜も遅くまで、其扇からいろいろな逸話を聞いた。そうした細かいことのひとつひとつが、長崎奉行や通詞たちと話をする時に泰然を長崎通に見せていた。

特に地の者しか知らない、微妙な人間関係についての情報は、特に有意義だった。その結果、泰然はいろいろな場面、たとえば最新の蘭書購入時の交渉などを有利に運ぶことができた。

泰然は其扇に、ついさっきまで会っていた緒方洪庵のことも語った。

「まったく、章の融通の利かなさにはあきれ果てます。けれどもおいらとは違う、ああいった芯の通った男が、これからの日本には必要とされることになるかもしれません」

「章さまというお方に、妾わいわも一度お目に掛かってみたいであります」

「そいつは、ちと難しいでしょうね。章は花街は今回が初めてのようでしたし、今後は二度と足を踏み入れることもなさそうですから」
そんな会話を交わす其扇の膝の上で、はしやぎ疲れたイネがすやすやと寝息を立てていた。

*

その日以降、洪庵は林洞海が寄宿する豊後町ぶんごの大石良英の私塾に、毎日通いつめた。

学究肌の洪庵は、泰然の舎弟の林洞海とは気が合った。天游の遺児、耕介も連れていった。

大石良英は長崎の通詞・大木家の次男だが、若い頃から崎陽きようの名医と謳われていた。

やがて佐賀の鍋島藩医の大石家の養子になると、シーボルトの門下生になった。

シーボルト事件の後は江戸に出て同郷・同門の先輩、伊東玄朴の「象先堂」に入門し、同年代の緒方洪庵・青木研蔵と共に「塾中の雪月花」と称されたことは前に述べた。

後の弘化元年（一八四四）には佐賀藩の鍋島閑叟に召されて藩医となり、佐賀藩の洋学興隆に寄与する。

洪庵は蒲柳ほりゆうの質で、根を詰めるとすぐに熱を出して寝込んでしまう。だがこんな機会は二度とないと思うと、弱った身体に鞭打ち、耕介と共に出掛けて行くのだった。

洪庵が長崎に到着した半年後には、江戸の先輩、青木周弼おつかいと岡蔵おかざうが合流した。

二人は元鳴滝塾生なので、長崎には馴染みがあった。なのでたちまち昔の勘を取り戻して、洪庵と共に活発に活動を始めた。

知り合いのオランダ通詞からオランダ人医師「プラッヘ」が著した、最新で最も正確と思われる「蘭方処方箋集」を入手した兄貴分の青木周弼が、手分けして翻訳しようと提案し、後に「袖珍内外方叢」として完成させることとなる。

こうした中で、天游の遺児の中耕介は青木周弼のおおらかな人柄に惹かれ、長崎を辞去した後は、青木周弼が長州で立ち上げる医学教授所「好生館」で修学することになる。

こうして大石良英の私塾は、蘭学者のサロンのようになっていた。

そこには泰然も顔を出し、洪庵と顔を合わせる機会が増えた。

泰然は商館長ニーマンや、密かに来日していたオランダ人医師から出島で直接学び、わからない点を大石良英に質した。洪庵が泰然を煩わしく感じなかったのは、サロンに出入りする蘭学者たちとの交流で、頭が一杯だったからだ。

洪庵が青木周弼、岡海蔵と一緒に蘭書の翻訳をしていると、他の者が寄ってきて、ああだこうだと口を挟んでくる。多少煩わしかったが、それがまた楽しくもあった。

こうして洪庵の毎日は、学問に耽溺して、過ぎ去っていった。

その頃、洪庵は幾度か、出島の前まで歩いて行ったことがあった。

長崎湾の奥まった場所にある出島は、小さな人工島で板塀いたべいで囲まれている。南方に開いた扇形おむぎがたで、端から端まで歩いても二十分は掛からない。南と西は海湾に臨み、東と北は小さな川が市街を隔て、石橋が架かっている。ひとつだけの石橋の南口の門にはいつも門番が詰めていて、奉行所の許可証を持つ者だけが出入りを許されていた。

背後の小高い丘の上には、出島の出入りを監視するかのよう
に、立町奉行所が睨みを利かせている。洪庵は、石橋のたもとに掲げられた制札を遠くから眺めているだけで、足が震えてくる。ましてや背後の奉行所など恐ろしくて、振り返ることなどできない。

その意味では、出島に対するこの監視体制は、効果的だったわけだ。

その狭い島の建物は全て木造で、オランダ商館員、日本の役人や通詞の家屋、倉庫、番所、札場ふだばなど六五棟がぎっしり隙間なく立ち並んでいるのだという。国旗掲揚台こっさけいようたいが設けられた側の空き地には、小さな遊園地と菜園まであるらしい。

一番気になる医官舎いかんしゃは、石橋のたもとの南表門から真っ直ぐ進み、街筋を右に折れてすぐ側にある、日本風二階建ての建物で、側には番屋がしっかり張り付いている。

その建物は、洪庵が今佇んでいる、石橋のたもとからも遠望でき

た。

建物を眺めていると、浪速の橋の上で「合水堂」がつすいどうを望見し、いても立ってもいられない焦燥しょうそうに駆られた頃を思い出す。けれども今の洪庵には、あの頃のような焦りはない。

聞くところによれば泰然は、今では許可証もなくわがもの顔で出島に出入りし、医官舎でも我が家の如く過ごしているという。

——私にはとても真似ができぬ。

そう呟いたが、悔しいとも残念とも思わなかった。

洪庵にとって蘭学とは、書物の中に息づいている精神であり、言葉聞き取る手助けをしてくれる辞書があり、通詞がいればそれではなかった。

まして、オランダ人と直接会話を交わしたい、などと考えたことはなかった。

疑問を本に問いかけると、本が答えてくれる。洪庵はそれで満足していたのだった。

暑かった夏が終わり、秋風が吹く十月末、街は諏訪大社すわたいしやの祭り一色になった。

だが洪庵は街の賑わいには目もくれず、ひたすら蘭学の修学に励んでいた。洪庵に引きずられるように仲間も修学していたが、どこ

か気もそぞろな様子だ。

特にまだ少年の中耕介は、外で銅鑼どらの音がしたりすると、はっと顔を上げたりする。

そこに泰然がやってきて、部屋で蘭書を読んでいる面々を見て驚いて声を上げる。

「なんだなんだ、みんなは諏訪大社の祭りに行かんのか？ こいつはたまげたな」

数人の塾生が顔を上げ、すがるような目つきで泰然を見た。どうか自分たちを、この息苦しい部屋から賑やかな祭りの場へ連れ出してくれ、と彼らの目は哀訴あいそしていた。

泰然はその視線をさらりと受け流すと、久しぶりに洪庵に話しかけてきた。

「まあ、いいや。今日は章のために、珍しいお客さんをお連れしたぞ」

泰然の後から部屋に入ってきたのは、派手な段だら模様の着物を着た、相撲取りのような巨漢だいおんじょうだった。大音声の銅鑼声だいいんせうが部屋に響いた。

「こんお方が、緒方洪庵殿でござるか。おいどんは檜林栄建えいけんと申す者。大石良英殿や青木研介殿と並び称された『象先堂』の『雪月花』のひとりをおひとりと目見てみたくて、こうして馳せ参じ申した次第」

場の空気が一変するような、強烈的な存在感がある。

泰然が言い訳をするように言う。

「すまん、章。お前とはできるだけ顔を合わせないようにするという約束を破つちまってる。栄建殿が、どうしても章にひと目会わせろ、とやいのやいのとしつこいもんでな」

洪庵はにっこり笑い、頭を下げる。

「とんでもない。通詞でもあり、医家として名高い榎林家の方と知り合えて光栄です」

「いやいや、オランダ通詞の序列では榎林は中の上よ。おまけに通詞の榎林家が本家で、医家は分家だ。生業はもっぱら外科だし、な」

泰然がにやにや笑ってそう言うのと、栄建はむっとして言い返す。

「まったく、ひどい言いようたい。わが弟の『大成館』で修学しておるくせに、泰然殿はおいを褒めるのか貶すのか、さっぱりわけがわからん。まあ、勉学に熱心な洪庵殿にお目に掛かるのだから、もちろん手ぶらではござらん。洪庵殿がお気に召すであろう秘録をお持ちしたと。洪庵殿は修学を邪魔する者を蛇蝎だかつの如く嫌う、と泰然殿に脅おどされたのにな」

そう言って栄建は、懐から一冊の書物を差し出した。

「拝見いたします」と一礼した洪庵は、たちまち書籍に没頭した。

「あーあ、馬鹿だなあ。なんだって最初にそいつを出すんだよ。こ

うなると章はどうにも収まりがつかなくなっちゃまうんだぜ。まったくもう」

泰然がぼやいた。

「すまん。ぼってん、まさかここまでの御仁とは思わなんだ。なるほど、確かにこのお方は、おいの弟によう似とるわ」

「そうだろう。跡取りに相応しくないから、弟君に継がされるような栄建殿なら、おいらが章に毛嫌いされているのもわかるだろ？」

「せやね。ぼってんこういう人たちがいてくれるおかげで、おいどんや泰然殿みたいな外れ者が好き勝手ができるのだから、感謝せんといけん」

泰然と檜林栄建のそんなやりとりも全く耳に入らず、洪庵は一心不乱に本の内容に没頭した。

やがて、その本を一気に読み終えた洪庵は、ほう、と吐息をついて顔を上げた。

「この書物は、どなたが書かれたのですか？」

「長崎通詞の白眉^{はくび}、馬場佐十郎先生たい。長崎の巨星、志筑忠雄大先生の愛弟子だった佐十郎先生は享和三年（二八〇三）頃、オランダ商館長のゾーフ殿から、欧州では痘瘡の予防として牛痘種痘法^{しゅじゅう}が成果を挙げているという話を聞いた。蘭語の他に、仏語、英語に通じておられた佐十郎先生は文化五年（一八〇八）、世界地図の編纂の

ために幕府の天文方に召し抱えられ、文化八年（一八一二）には『シヨメル百科事典』を、江戸の大槻玄沢先生おおつきげんたくと翻訳しつつ、江戸の蘭学者にオランダ語文法を教えていたと」

なるほど、自分の師の師の、更に師だったわけか、と洪庵は思う。

栄建は続けた。

「文化十年（一八一三）にはロシア語を学ぶために蝦夷の松前藩に出張を命じられ、そこで『牛痘にて天然痘を逃れる法』というオロシア本を手に入れたと。それはロシア人に拉致らちされた択捉島えとろふの番人・中川五郎治ごろうじが文化九年（一八一二）に帰国した際に、持ち帰ったものたい。佐十郎先生はそれを筆写して江戸で七年かけて翻訳し、文政三年（一八二〇）に『遁花秘訣』とんかひけつにまとめた。それがその本た。い。『花』とは痘瘡のがのことで、それから遁れる秘訣、という意味たい」

すかさず泰然が合いの手を入れる。

「そして天才・馬場佐十郎先生にオロシア語の手ほどきをしたのが、大黒屋の爺だいくやちゃんなんだ。オランダ人の親切は、利が絡んでいるから、心底から信用しちゃうあなんねえぞって爺おやちゃんは言ってたぜ。おいらはその言葉をいつも肝に銘じているんだ。なんでも爺おやちゃんはオロシアで、オランダ人に助けを求めたのに、冷たくあしらわれたんだとさ」

大黒屋のことを知らない洪庵は、泰然の言っていることがまった

く理解できないので、いつものように泰然を無視して、檜林栄建に訊ねる。

「ここには『人痘を植えると余毒よどくで死ぬ者もあるが、牛痘は毒が残らず痘瘡になる心配もない』と書かれていますね。驚きました。この本はどこで手に入れることができるのですか？」

「わが檜林家に写本として伝わる秘本だから、あなたには入手できません」

「そうですか」と洪庵は一瞬、残念そうな表情を浮かべてうつむいた。

だが、すぐに気を取り直して言う。

「そういえば松前藩では、オロシアから持ち込んだ牛痘株の接種が行なわれたことがあったとお聞きしましたが」

「さすが安懐堂の駿馬、よくご存じたい。それは中川五郎治が独自にやっていたことばってん、残念ながら誰にも伝えず死んだので、松前種痘は絶えてしまったと」

そう言いながら、檜林栄建は懐から布袋を取り出し、机の上にな身を広げた。

それは小刀に似ていたが、見たことのない形をした刃物だった。

「これは先端に溝を掘ったランセットランセット(両刃メス)というものたい。

これで腕に傷を付けた後、牛痘の痘漿痘漿を傷口になじませると」と、

栄建が銅鑼声で言う。

洪庵は、手に取ったランセットの刃先を、まじまじと見た。そして訊ねる。

「種痘をすると、実際の痘瘡と似た経過を取るといのは本当なのですか？」

栄建は得意げに、「そんな通りた」と言つてうなずくと、滔々と続けた。

「種痘を植えた七日の後、水泡すいほうになった痘疱とうほうから痘漿うみ（膿）を掬すくい、種痘を受ける次の子に植える。痘漿は透明で水状のものがよく、黄色味を帯びた膿状のものは効果が薄いので用いない。今は、清国からもたらされる人痘が主なんやが、あまり効果がなかったり、却つて痘瘡とうそうになってしまつたりと不安定たい。だからおいどんたち長崎の通詞は万全の備えをして、オランダから新たな痘漿とうほうがもたらされてくるのを待ち構え、そんな時に連れて行く通詞の子どもば決めてあると。まあ毎年、子どもの名簿は入れ替えねばならんけどな。さて、本日はお近づきの印に、洪庵殿にそのランセットば差し上げたい」

「こんな貴重で高価たかひそうなものを、いただくわけには参りません」

「確かに高価たかひだし巷ちまたでは珍しいものばつてん、持つべき人間が持たねば、宝の持ち腐れたい。幸い檜林家には他にまだ数本あるから、遠慮は無用たい」

「しかし……」となおもグズグズする洪庵に、泰然がびしやりと言
う。

「遠慮するなよ、章。榎林家はお大尽だからそんな刃物のひとつや
ふたつくらい、どうってことないんだから。それにある日いきなり
種痘をやれ、という命が下るやもしれん。その日のためにもらつて
おけ」

「わかりました」と洪庵はうなずくと、ランセットを入れた布袋を
丁寧に懐に収めた。

すると洪庵の付き人のような中耕介が訊ねる。

「お二人はよくご一緒されるのですか？」

「まあね。おいらは栄建殿の弟の宗建殿の医塾『大成館』に出入り
して、ご指導を仰いでる。秘伝の処方も惜しげもなく公開するなど
気前がいいし、榎林流は外科の大家、手技は豪快で思い切ったとこ
ろがある。おいらは一発で気に入っちゃったよ」

「江戸では外科は非力と聞きます。その点、剛胆な泰然殿は外科向
き、旗揚げすれば流行ること、間違いなか」

「おお、榎林家のお墨付きとは、心強い。確かにおいらは辛気くさ
い蘭書の読解や、証を立てろ、とやたら口やかましいばかりの本道
(内科)には向かん。外科は悪くないな」

「泰然殿はまっこととんでもないお方ばい。おいが四年間、手塩に

掛けて育てた三宅良斎みやけりんさいどんが、泰然殿に出会った途端、一緒に江戸について行きたいと言いつ始末たい。口八丁手八丁とは泰然殿のような方のこと、恩を仇あだで返すとはこのことたい」

「別においらは良斎を勧誘した覚えはないんで、そいつは冤罪えんざいだぜ。そもそもおいらは栄建殿には、医業の他の方面でもいろいろ教わっているんだから、逆らえるはずがなからう」

「他の方面、と申しますと？」

興味を惹かれた洪庵は、ついうっかり、つられてそんな風に訊ねてしまう。

「栄建殿は、町年寄の高島秋帆殿たかしましゅうはんともツーカーの仲で、蘭学で医道と並ぶ二本柱のもう一方、砲術についても相当詳しいんだぜ。『掌中ちゆうちゆう医方』なんていう医方の名著を書いたかと思えば、片手間に『西洋軍艦表』やら『西洋火薬表』なんていう、きな臭い本も出してんだ。オランダ商館長のニーマン殿も栄建殿のことはベタ褒めしてたよ」

褒めれば褒めたで、栄建は照れて言葉を素直に受け取ろうとしな

い。
「あれは余技よぎみたいなもんだい。ばってん、秋帆殿は江川英龍殿えがわひでたつや佐久間象山殿さくましょうざんなんていう、剣呑けんのんな思想のお歴々にも出し惜しみすることなく、砲術の肝を教えるもんだから、幕府に目を付けられてい

るといふ噂たい。最近はお伊も用心しとると」

そう言うくと、段だら模様を着流しの栄建は、再び洪庵に向き合う。

「ところで洪庵殿は、『ゾーフ』の筆写は、どこまで終えたと？」

『『T』の冊子が終わり、『U』に入るところです」

「ほんならもう一息やね。ゾーフ殿は『T』まで仕上げから帰国なさりんしゃった。そのあと通詞が引き受けて完成させた。訳業の中心となったんは、檜林家と並ぶ通詞医家の名門、吉雄家の権之助先生だったと。ばってん権之助先生は、シーボルト事件でお咎めを受けて獄に入り、亡くなられてしもうた。権之助先生は当代一の通詞で、お伊と弟はいつも権之助先生に可愛がってもらったもんたい。まっこと惜しいお方を亡くしたもんたい」

悔しそうに唇を噛みしめる栄建の横顔を見ながら、

「左様でしたか」と洪庵は小声で呟く。

「ゾーフ殿はまっこと大したお方だったばい。商館長を務めた十五年間は、ナポレオン戦争で母国オランダは併合され、蘭領ジャワ島を占領したイギリスが、出島の商館の乗っ取りを企てるという、大変な時期やった。ゾーフ殿は長崎に侵入した英国軍艦フェートン号を長崎奉行と協力して対応なさり、世界で唯一、オランダ国旗を長崎・出島に掲げ続けた、硬骨漢こうこつかんたい。あの事件では、国威こくゐを辱はづかしめた責任を取って当時の長崎奉行・松平康英殿が切腹を申しつけられ、

勝手に防衛の侍を減らしていた鍋島藩の家老数名も殉じとる」

「松平康英奉行のお墓は大音寺で見ました、立派なお墓でした」と
洪庵はうなづく。

「せやろ、あれぞ長崎の民の気持ちや。江戸から出向する長崎奉行は、墓が長崎にあることは滅多にない。ゾーフ殿は、紛争によってオランダ本国が消滅して、貿易は困難になったことを『阿蘭陀風説書』に記すべきか、大通詞と相談して、書かんことにしたと。代わりにアメリカ商船を傭い交易を続けたばってん、その後、本国が戦争のため来船できずと届け出ても、江戸参府は免除されたばい。幕府は、見て見ぬふりをしたと言われとる」

洪庵は、そんな気骨のある人物がいたことに感動した。

檜林栄建は、続けた。

「実は『ゾーフ・ハルマ』は、母国のオランダが亡国の瀬戸際せとぎわにあつて、経済基盤を失いかけていたオランダ商館への援助という側面もあり、お上は馬鹿高い翻訳料を払ったらしいと。ばってん、ゾーフ殿は日本のためを思ってくれたから、そんだけの価値はあり、そう思えば安いもんたい。ゾーフ殿は日本の女性も愛し、花魁との子を国に連れて行くとしたばってん、お許しが出ず泣く泣く置いていったと。そんな代わり面倒を通詞に頼んで行ったばい。ご子息の名は『道富』、音読みで『ドウフ』、つまりゾーフ殿たい。不幸にも道

富殿は若くして亡くなられたとよ」

そこで榎林栄建は言葉を切ると、声を落とした。

「ゾーフ殿は帰国途中、嵐で船が難破し多くの資料を失ったと。すると蘭館の後任者がオランダで『ゾーフ・ハルマ』は自分の業績だと言ひ張り、争いになったばってん、長崎通詞が証明書を出し、ゾーフ殿の業だと正しく伝え、事なきを得たばい。そのゾーフ殿も一昨年、故郷で亡くなったとニーマン商館長が教えてくれたばい」

日本をそこまで大切に思ってくれたオランダ人がいたかと思うと、洪庵の胸はいっぱいになる。そんな洪庵の表情を見て、泰然が言う。

「では皆の衆、せっかくの諏訪大社の祭りだから、ちよつと縁日を覗いてから、ゾーフ殿の偉業を偲んで『引田屋』に繰り出そうではないか。おいらが奢るぜ」

わつ、と塾生が歓声を上げる中、ひとり洪庵だけは頭を下げる。

「せっかくですが、私はお誘いはお断りします」

「なんとまあ、無粋ぶすいなお方ばい」

栄建が舌打ちをすると、泰然が彼の肩を、ぼん、と叩く。

「な、だから言つたらう。章はどうにもならん朴念仁ぼくねんじんなんだよ」

「ほんにクソ真面目な御仁たい。ばってん今度、弟の宗建を連れてくるから、会つてくれんね。きつと、ぬしとは気が合うと思うばい」

そう言い残した栄建は泰然と肩を並べて、大股で部屋を出て行つおおもた

た。

その後を蘭学生たちが、わいわいとはしやぎながらついていく。

洪庵の顔色を窺いながら、中耕介も一緒に出て行つた。

あとにはひとり、洪庵が残された。

さつきまでの喧噪けんそうが嘘のように、部屋がしんと静まり返る。

その静寂の中、洪庵は「ゾーフ」の親本を広げ、黙々と『U』の項の筆写を始めた。

それからしばらく後、栄建が心配していた通り、高島秋帆が幕府のお咎めを受け、禁固きんこの処分を受けた。

阿片戦争あへんで清国が英国に敗れたことに危機感を覚えた秋帆は、天保十二年（一八四二）五月、火砲を近代化すべし、という意見書「天保上書」ほうじょうしよを幕府に提出した。

そして江戸で洋式砲術の公開演習を行ない、老中首座・阿部正弘らうじゆうしゆぎより「火技中興洋兵開基」かぎちゆうこうようへいかいきとの称号を賜り、江川英龍などに砲術指南をした。

ところが翌天保十三年（一八四二）に、密貿易をしていたという讒言ざんげんをされてしまい高島家はお取り潰し、本人は武蔵国岡部藩むさしおかべにて蟄居ちつきよとなった。

連累れんるいを避けた榎林栄建はその年、長崎に見切りをつけ、家督を弟

の宗建に譲り、京都に出て、かつての門人だった日野鼎哉宅に寄寓し、各地を移り住んだ。

そして富小路三条上ルで開業し、そこで再び、洪庵と縁を結ぶことになる。

このようにして、長崎の洪庵は、気が合う学友と最新の蘭書を訳し、「ゾーフ・ハルマ」の筆写にひたすら励んだ。

そうこうしているうちに、三年の月日はたちまち過ぎ去っていった。

とても学び尽くせたとはいえないものの、全五八巻、総頁三千の稀観本「ゾーフ・ハルマ」の筆写は、なんとかやり遂げることができた。

「ゾーフ」を筆写しつつ「袖珍」の逐語訳をしていると、単語のひとつひとつが生物のように自分の中に染み込んできて、息付いていくような気がした。

蘭語の力がぐん、と伸びたのが実感でき、それがまた楽しくて洪庵は、一層筆写と翻訳にのめり込んでいった。

訳し終えた「袖珍」は刊行こそされなかったが、大石の私塾の中で回し読みされ、筆写されて次第に外部へ広がっていった。

そして「大石塾に緒方洪庵あり」と、その名は長崎中に知れ渡っていった。

洪庵は雑費を稼ぐため医院の真似事もした。だが四角四面で謹厳な性質が災いしてか、蘭学者としての名声とはほど遠く、医院は流行らなかつた。

病人は手っ取り早く安心させてもらいたがるものだが、洪庵はまづ病の理から諄々じゆんじゆんと説き起こし、身心の状態を理解させるところから始めた。

その峻厳しゆんげんな口調に、患者は萎縮いしゆくしてしまったのだろう。

洪庵が患者を思う真心に触れば、他の医家の誰よりも愛情深いとわかるのだが、真情を市井しせいの民に届ける言葉を、洪庵は持ち合わせていなかった。

一方で洪庵は、どこにいても舎弟を作ってしまう泰然の生臭さに辟易しつつも、彼が惹きつけた人々とは慎ましやかに付き合った。

それは後に洪庵にとって素晴らしい人脈となった。

洪庵は泰然に終生反感を抱き続け、真逆の性格のようにも思っていたが、実は二人には似たところもあった。

人を惹きつける魅力があり、他人や学術に対する広い度量を持ち合わせていたことだ。

そう考えると洪庵が泰然に抱いた反感は、近親憎悪に似た感覚だったのかもしれない。